

Devilblade —デビルブ レイド—

滅悪狩人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大切な人との日常を無慈悲にも奪われた少年は理不尽で残酷すぎる世界を憎んだ
こんな世界を作った神を呪った

神への憎しみを心に抱きながら少年は青年へと成長した

そして、かつて人と神が暮らしていた楽園に連れて行ってほしいと願う少女との出逢いから青年の旅が始まるのであった

右腕の異形の力と共に

その力、悪魔か、神か

目次

第一章	出逢い	1
第一話	依頼	1
第二話	終焉	53
第三話	運命	96
第四話	右腕	124
第二章	機械仕掛けの人形（ブレイド）	
第五話	篝火	159

第一章 出逢い

第一話 依頼

天空にそびえ立つ「世界樹」（せかいじゆ）を中心に広がる雲海（うんかい）の世界
『アルスト』

雲海、さらには世界樹が誕生するよりも昔の古（いにしえ）の時代

世界は魔界の帝王とその軍勢の進行により破滅の一途を辿っていました

人類は絶望に打ちひしがれすべてを諦めかけていました

しかし

絶望する人間達を見た一人の悪魔が正義の心に目覚め、自らと同じ名を冠した魔剣を手にした一人で魔界の帝王とその軍勢に立ち向かったのです

人類の味方をする悪魔に人間達は、感謝し、崇め、そして共に魔界の帝王と戦いました

人類の協力によりその悪魔は魔界の帝王と軍勢を倒したのち、自らの強大すぎる力と共に魔界を封印し人類を悪魔の脅威から救ったのでありました

世界を救ったのち、その悪魔は忽然と姿を消したが人類はその悪魔に感謝し平穏な世界を保つことを誓ったのでありました

人類の救世主となったその悪魔の名は

魔剣士『スパーダ』

パタンツと本が閉じられた。

「平穏な世界を保った結果がこれかよ……」

本を持っていた青いサルベージスーツを着た“青年”は機嫌が悪いのを隠す様子もなく吐き捨てるようにそう言うのと、本を見渡す限りの白い海である雲海へと投げ捨てた。

青年は雲海に浮かぶ孤島でビーチチェアに寝転がっていた。

髪やサルベージスーツが濡れており、先程までサルベージを行っていたのだろう。

「なんじゃ今日はいつもより機嫌が悪いの？」

「…別に……いつも通りだよ」

そんな様子を見ていたのかしやがれた老人のような声が聞こえ、青年がそっけなく返すが彼の周りには誰も居らず青年しか孤島にはいなかった。

「そうか……で、どうじゃったお宝の具合は？見立てどおりだったのか？」

「まずまずつてところだな手間賃を差し引いても、こないだ引き上げた軍需物資を売ればお釣がくるだろ……今なら軍需物資は高く売れるしな、戦争様々だな」

「引き上げるものの構造計算に2日もかけるくせに、損得勘定だけは早いんじゃない」

老人の声と共に孤島の前方から長い首のようなものが上がってきて、一本角を持った竜の頭が現れた。

孤島だと思っていた場所は、どうやらこの竜の背中だったようだ。

「うるせえな、せめて商売上手つて言え……よっ!!」

青年は竜の言葉に文句を返しながら大きめの工具を持ち出すと、先程引き上げたであろう施錠された鉄製の箱の隙間に差し込んだ。

「こんなクソツツタレな世界を必死に生きてんだから、せめて遅たくましいって褒めろよ…なっ
!!……………っ!？」

竜にそう言いながら箱をこじ開けようとしていた青年だったが、不意に中から気配を感じた彼はとっさに後ろへ下がりが警戒した。

それと同時に箱が内側から開けられてナニかが飛び出してきた。

それは大きな鋏はさみを持ったエビのような姿をしたモンスターであった。

「ギシャアア!!」

「カムリ・シユリブか、こいつは七輪で焼けば美味しいんだよな」

青年がポツリとそう呟くと、言葉を理解したのかは分からないがシユリブは鋏を大きく振りかぶり青年に振り下ろした。

「おっと…」

それを青年は余裕そうに身体を捻ひねりながら後ろへ軽く跳んで回避した。

「大丈夫か!？」

「平気だ、こんなザコに負けるかよ」

そう言つて青年は後ろの家にある武器を取りに行こうとするが、それを見過ごすモンスターではなく背を向けた青年に向かつて飛びかかった。

「はしやぐなよエジ野郎」

しかしその行動を予想していたのか青年は腰のホルスターから銃を取り出し、ズドンツと大きな音と共にシユリブに向けて発砲した。

通常の銃火器ではシユリブの硬い甲殻は貫けないのであるが、青年の持つ銃は違つた。

銃弾を受けたシユリブの装甲は砕け、その身を貫いたのであつた。

「ギギイイツ!？」

「おいおいまさかこれで終わりじゃねえだろうな」

断末魔を上げのたうち回るシユリブに向けて、武器を取つてきた青年は挑発の意味も込めたセリフを言いながら手元の銃を弄いじつていた。

青年の持つ銃は、上下2つの銃身が伸び、一般的な銃と比べて一回り大きい銃であった。

「ギギギツ!!」

「立ったな……なかなかガッツがあるじゃねえか」

立ち上がったシユリブを見て満足そうにそう言うと、青年は家から取ってきて背負っていた武器を背中から引き抜いた。

銃と同じくその武器もまた異質であった。

見た目は片刃の剣なのだが大きさが青年の身長と同じぐらいあり、柄の部分にはバイクのアクセルのようなものとレバーのようなものを取り付けられていた。

そして青年が剣を下に突き刺し柄の部分を捻ひねると重厚な音と共に剣から炎が噴き出した。

「アイタタタツ!! コラア!! ワシの背中に剣を突き刺すなどあれほど言ったじゃろうが!」

「あつ……わりい、ついつも癖で」

だが突き刺した場所が地面ではなかったために青年は竜に怒られてしまった。

「ギギイツ!!」

青年と竜が漫才のようなやり取りをしている隙すきにシユリブが再び青年に飛びかかってきた。

しかし

「ギツ!?!」

エンジンを吹かすような音と同時にシユリブの両腕の鋏が根元から切断されていた。前を見れば青年がすでに大剣を構えシユリブに向かって突進してきていた。

「Be ^失gone!!」

そしてセリフと共に突進の力を利用して横一線に剣を振り抜き、シユリブの身体を真つ二つにした。

そのままシユリブの身体は斬られた衝撃で後ろに吹き飛び雲海へと沈んでいった。

「よし終わりっ!!」

「相変わらず豪快な戦いぶりじゃな」

「まだまだ暴れ足りないけどな」

そう言うのと、青年は切断したシユリブの腕を焼くための七輪の準備にかかっていた。

「今日の七輪の場所はここでもいいか？」

「そこでええぞ」

「あいよ」

竜の返答を聞いて青年は七輪に火を点けて、シユリブの腕を乗せた。

その後は、シユリブの腕が焼き上がるまでの間に青年はシユリブの入っていた箱を調べたり、銃や剣の手入れをするのであった。

しばらく時間が経ち不意に七輪に目をやれば、しっかりと焼き上がり殻が赤く染まつたシュリブの腕があつた。

「ああ、七輪の熱が心地良いわい……肩こりに効くの」

「そろそろ動かすか？」

「いや、しばらくはそこでいい」

「わかった」

そう言つて、青年はシュリブの腕を七輪から上げて殻を割り豪快に身にかぶりついた。

その時

どこからか鳴き声のようなものが聞こえ、青年が立ち上がり声が聞こえてきた方向を

見ると、サメとエイが混ざったような巨大生物が雲海から現れて胸元の光が消えるのと同時に沈んでいく姿があった。

少し遅れて雲海に沈んだ際の風圧が竜と青年の所にまで吹いてきた。

「また……巨神獣アルスが死んだのか、最近多いな」

「たしかに増えたの」

「人は……いねえか、居たとしても逃げ出してるかしてるだろうしな」

沈んだ巨神獣アルスのことに興味がなくなったのか青年は再び七輪の前に座ると、食事を再開した。

「いずれ命が尽き雲海に沈む……それがワシら巨神獣アルスの運命さだめじゃからの、抗あらがったところで詮せん方かたない」

「セイリユウのジイさん達、巨神獣アルスは本当にあの上で生まれたのか？」

青年は遠くでそびえ立つ世界樹の上を見ながら竜あらため小型巨神獣アルスのセイリユウ

に問いかけた。

「さあな、伝承ではそうなつとるがワシが生まれたのはこのアルストの世界じゃ……ご先祖がどこで生まれたのかまでは知らん」

「世界樹の上の楽園……か……」

そう言つて青年は自身の右腕に視線を向けた。

そこには何重にも巻かれた包帯によつて隠された右腕があつた。

「もし本当に神様つてヤツがいるのなら、俺は楽園に行きてえ……そして……」

右腕から世界樹に視線を変えた青年の表情には、怒りと憎悪の感情が込められていた。

「こんなクソツタレな世界を作ってくれやがった神をブツ殺してやるっ!!」

しばらくして食事と休憩を終えた青年は、売りさばくための商品の確認をしていた。

「今日はこのぐらいでいいか……ジイさん、今からアヴァリティア商会に向かってくれないか?」

「今から換金か? ワシはもう寝る時間なんじゃがの」

「ワザとらしく老け込むなよジジイ、まだ日は高いだろうが……それに寝るならアヴァリティア商会についてから寝ろよ」

「まったく巨神獣^{アールス}使いの荒いヤツじやの、レックスは……」

「そう言うなよ、それに換金したらしばらくはサルベージ業は休業してのんびりするんだからよ」

文句を言いつつもアヴァリティア商会に向かうセイリュウに対して、青年もといレックスはそうなだめたのであった。

?アヴァリティア商会?

セイリュウがアヴァリティア商会に向かっている間にレックスはサルベージスーツからいつもの普段着に着替えを済ませていた。

ズボンにはサルベージスーツの伸縮性の半ズボンから黒のジーパンへ変わり、靴もサルベージ用から中に鉄板を仕込んだ特注の黒ブーツへと履き替えていた。

上半身は少し厚めの半袖シャツの上に紺色のフード付きコートを着ており、両腕の袖は肘のところまで捲^{まく}られて裾^{すそ}は膝裏のあたりまで伸びているコートであった。

そして、大剣を背負うための革製の剣用ホルスターと腰背部に大型リボルバーをしまふためのホルスターを身に着け完全武装もしていた。

「ようレックスじゃないか、景気はどうだい?」

「悪かったらこんな所に来ねえよ、あと荷揚げは換金してから下ろしてくれ」

アヴァリティア商会に到着したレックスがセイリュウから降りた所に、アヴァリティア商会の者らしき人物が喋りかけてきた。

彼はアヴァリティア商会に船を停める時の代金回収係であるため、よくアヴァリティア商会に来るレックスとは顔馴染みになっている。

「わかった、船を停めるなら半日で15ゴールドだぞ」

「ほらよ」

そう言って、レックスは小さな革袋を投げ渡した。

「毎度あり……ってレックス!!これ30ゴールドあるぞ!?!」

「商談が長引いた時の為だ、釣りはいらねえから取つとけ」

そしてレックスはそう言うと、商談をするためにアヴァリティア商会の中へと歩いていった。

「はあ、相変わらず金使いが荒いというか豪快というか……ずいぶん変わったなレックスの奴……そう思わないかいセイリユウさん」

「そうじゃの……」あの子”を失った時からレックスは変わってしまった」

セイリユウはかつてレックスに寄り添ってくれていた少女のことを思い出していた。

一方、商談のため向かっていたレックスは不意に足を止めて港に停泊していた船を見ている。

「あれは……巨神獣船じゃないのか、スゲエなあんなデカイのに」

停泊していた船の中の一隻にレックスは興味を持っていた。

その船は黒のボディカラーをしており船首部分には金色の装飾がなされていた。

そしてなにより一般的な船である巨神獣に船の部分を取り付ける巨神獣船ではなく機械のみの力で動いているということにレックスは興味を持っていた。

「おっとそんな事より……さっさと換金しねえとな」

船に気を取られていたレックスは換金のことを思い出し、再び歩き出しアヴァリティア商会の中へと入っていったのであった。

「レックス!! 今日も稼いできたのか? やっぱりお前さんのサルベージ技術には恐れ入るねえ!!」

「レックスさん!! またウチのパン買って行ってくださいいね!!」

「ようレックス!! また珍しいものを手に入れてよ、またあとでウチに寄ってつてくれ!!」

「レックス!! 今日もバッチリ服装決まってるねえ!!」

換金所に向かうまでの間にアヴァリティア商会の中で商品売っている商人達から声をかけられてレックスは左手を上げて応えていた。

特に若い女性商人からは熱い視線のオマケ付きで声をかけられていた。

今年で19歳になるレックスは世間一般的に見てもイケメンの部類に入るほど顔が整っており、体格も細身でありながら鍛えられていて、180センチ前後の長身も相

まっつてレックスの魅力を引き上げていた。

レックスは周囲から声をかけられながら歩き進み、換金所にいる小さい体と器用に動く大きな耳が特徴的なノポン族のメロロのところに辿り着いた。

「よう、換金を頼みたいんだが……」

「おやレックス久しぶりも、今日もずんどこ儲けて来たかも？」

「稼げたかどうかはあんたとの商談しだいだな……とりあえず換金を頼む、今回も軍需物資はたんまり持ってきたぜ」

「もももっ?!それは助かるも、じゃあ早速鑑定するも」

「よろしくな」

そう言つて、メロロは換金計算を始めたのであつた。

「換金計算終わったも!!」

「ふわあ、やつとか」

長時間の末、ようやく計算が終わったのかメロロに呼ばれるまで立ったまま壁に背中を預けて仮眠をとっていたレックスは軽くあくびをしながら再びメロロのところに来た。

「今日の換金代金は全部で10万ゴールドだも」

「結構いったな」

以外にも高額な値段になってレックスは少々驚いた。

「まあとりあえず2万ゴールドは今貰うぜ、残りは……」

「わかってるも残りはいつも通り匿名で『イヤサキ村』の『ゴルレル』さんでよかったかも?」

「ああ頼む」

「にしても仕送りもきつちりするなんてしつかりしてるも、ウチのバカ息子にも見習つてほしいも」

「まあそう言つてやんなよ……じゃあ仕送りのことは任せたぜ、それじゃあな」

「あいも!!任せるも!!」

そう言つてレックスは受け取つた換金代金の入つた革袋を懐にしまうと、待たせているセイリユウの元へ戻るために足を進め

「レックス……」

「ああ?」

ようとした矢先、後ろから声をかけられ振り返ると護衛らしき黒服の男を従えたノブ族がこちらに向かつてきていた。

「プニンか…久しぶりだな」

「相変わらずイキがいい……………じゃなかった威勢がいいも」

「まあな…で？俺を呼んだってことはなんか依頼か？…………それとも『ゴミ掃除』か？」

「最後のゴミ掃除という言葉を言ったレックスは目つきを鋭くさせたが、プニンは首を横に振った。

「仕事を持ってきたけど、今回はそっち関連の仕事じゃないも……………ところでレックスはリベラリタス島嶼群とうしよぐんのイヤサキ村出身だったかも？」

「あつ？……………そうだけど？」

突然出身地を聞かれ、レックスは怪訝そうな表情を浮かべたがとりあえず隠す必要もないことだったので頷いた。

「すぐに会長室へ行ってほしいも、バーン会長直々のご指名も」

「会長が……俺を？なんだろうな？」

とりあえず行ってみないと分からないということでもレックスは、早々にアヴァリティア商會会長の待つ部屋へと向かったのであった。

会長室へやってきたレックスを出迎えたのは、大きな宝石を身につけたノポン族であった。

「よく来てくれたも……アヴァリティア商會会長のバーンだも」

「ああ……俺はレックスだ、よろしく」

アヴァリティア商會会長という大物を目の前にしてもレックスは余裕そうな表情で言葉を返した。

「プニンからずいぶんと腕の立つサルベージャーだと聞いてるも……それを見込んでちよつと頼みたいことがあるんだも……報酬は10万ゴールドだも」

「へえ、なかなかいいじゃねえか」

サルベージ仕事ひとつで10万も貰えると聞いて、レックスは口元をニヤつかせた。

「ちなみにそれは手付金も、成功報酬はさらに10万プラスだも」

「……ずいぶん太っ腹だな」

さらに10万プラスだと聞いたレックスは顔は笑ってはいたが、内心きな臭い雰囲気が出てきたのを感じとっていた。

「まあいい、その依頼引き受けるぜ……で？依頼内容はなんだ」

「それは依頼主から直接聞くも……入れるも」

「はい」

バーン会長がそう言うと、会長室の両側に控えていた美女の一人が扉を開けた。

レックスが扉の向こうから複数人の気配を感じたの同時に、扉の奥から人影が現れた。

最初に出てきたのは、全身を覆うダイバースーツに似た黄色の服の上にフード付きのケープのようなものを羽織った猫耳の少女と両手足に光る石をつけたたてがみ たずさき鬘を携えた白い虎

次に出てきたのは、全身に黒の防具を身につけた黒髪の男と人型だが異形の姿をして胸に光る石が埋め込まれた生物

そして最後に出てきたのは、灰色の防具を身につけさらには顔の上半分を隠すように鬼の面をかぶった長い銀髪の男

計3人と2匹の人物が現れた。

「ドライバーとブレイド……か」

現れた者達を見たレックスは、彼らが亜種生命体「ブレイド」とブレイドと共に戦う「ドライバー」であると直感した。

すると、長い銀髪の男が今回の仕事について語りだした。

「依頼内容は、ある物資の引き揚げだ……最近の海流変動で発見された未探査海域のかなり深いところに沈んでいる」

「ふつ、引き揚げだけなら簡単に終わりそうだな」

意外と簡単すぎる依頼にレックスは鼻で笑った。

「ベテランのチームを紹介するって言ったけど、リベラリタス出身で少数精鋭の人材という希望だったも……それで白羽の矢が立ったのがお前なんだも」

「まあ、悪い気はしねえな」

「……ねえ」

バーンの言葉に少し気を良くしていたレックスに猫耳少女が声をかけてきた。

「アンタって本当に腕の立つサルベージャーなの？アタシから見たら傭兵にしか見えな
いんだけど……その背中の大剣とかちゃんと振れるのかも怪しいし」

「そうか？慣れれば振れるもんだぜ？」

猫耳少女のバカにしたような物言いに対してレックスが質問に答えつつ軽く流すと、
猫耳少女の隣にいた白い虎がゆっくりとレックスに近付いてきた。

「レックス様でしたな？此度はお嬢様が大変失礼なことを、何卒なにせでご容赦ようしゃを」

「ビヤッコ!!アンタまた余計な口出しを……」

「よせよニア」

失礼な事を言ってしまった主人に変わって謝罪する白い虎「ビヤッコ」に猫耳少女
「ニア」が文句を言おうとしたしたが、黒い防具の男に止められてしまった。

「まあ気持ちは分からんでもない、そして……確かめるのも容易い………」

「おっと!!」

黒い防具の男がそう言いながら、腰の武器に手を伸ばしたのを見たレックスはとつさに体を斜めに傾けると先程まで体があつた空間に鋭い斬撃が放たれていた。

「ほう……っ」

「よっ!!ほっ!!」

初撃を難なくかわしたレックスに興味が湧いたのか黒い防具の男はさらに二撃、三撃と攻撃を繰り返すがレックスは余裕そうな表情ですべて紙一重でかわしていった。

そして

「っ!?!」

「悪いな、男とこれ以上踊るのは癩しやくに障さわる………ここまでだ」

四撃目をかわしたレックスをさらに追い込もうとした瞬間、黒い防具の男の眼前には大型リボルバーの銃口が突きつけられていた。

「メツ?!いきなりなにやってんだよ!!アンタもそんな物騒なものしまいなよ!!」

突然の戦闘行為に固まっていたニアがそう言うと、黒い防具の男「メツ」は剣を収め、レックスも銃を回転させながらホルスターにしまった。

「こいつが見掛け倒しじゃないか不安だって言ったのはお前だぜ?」

「アタシはそんな事言っていないよ!!」

「言わずとも思っていたろ?……で、結果は予想以上だったってわけだ」

ニアとの話を終えたメツは、レックスの方を向くと問いかけた。

「なかなかやるじゃねえか、見たところドライバーではなさそうだが……どこかで傭兵でもやってたのか?」

「傭兵じゃないがなんでも屋をやつてな、よく盗賊やらなんやらとドンパチすることが多かったから……ほとんど我流さ」

レックスの答えを聞いたメツは軽く笑みを浮かべた。

「腕も度胸も十分すぎるほどあるということか……まあ、報酬分はしつかり働いてくれ」

そう言つて、メツは会長室から出ていきそれに続いて銀髪の男と異形の人型ブレイドも会長室から出ていってしまった。

そして、会長室にはバーン、レックス、ニアとビヤッコだけが残された。

「はあく………ふんっ」

突然の戦闘行為に疲れたのかニアはため息を吐いたあとレックスに視線を向けるが、すぐにそっぽを向いて会長室から出て行ってしまった。

ビヤッコはニアのあとを追う前に、礼儀正しく一礼をしてから主人のあと追つて会長室から退出した。

「ももっく!!何ともやかましい連中だも!!」

ようやく騒動が収まったのを見計らって、バーンは懐ふところからそれなりの大きさのある革袋を取り出すと机の上に置いた。

「手付金も……これで必要な装備を買い揃えてから右舷うげんの棧橋さんばしに行けも、そこで俺が手配した素晴らしい船が待ってるも」

「そうかい」

レックスはそう言つて、机の上の革袋を受け取ると足早と会長室から出て行つた。

会長室から出たレックスは受け取つた革袋をジャラジャラと左手で弄もてあそびながら、これからの事について考えていた。

「さてと準備も必要だが、まずはジイさんに報告だな……勝手に仕事受けてしばらく帰らなかつたら喧やかましいからな」

まずはセイリユウに報告した方がいいと思ひ、ひとまずセイリユウの待つ港に向かうのであつた。

「………というわけで、ちよいとした引き揚げ仕事を受けてきてな、2、3日は帰れねえと思うからしばらくの間ジイさんはここでのんびりしててくれよ」

「そうかそうか、ならワシはここでのんびり……出来るかあ?！」

おおまかな説明をし終わったレックスであったが、ノリツツコミの要領で当然のごとく怒られてしまった。

急に大きな声を出すのでレックスも思わず耳穴を指で塞ぎ後ずさった。

「勝手に奇妙な仕事を引き受けおって、依頼主の素性もわからんのじゃろ!？」

「なんとかなるだろ? なんでも屋の時もこんな依頼はごまんとあつただろ」

「それでもじゃ!! だいたい出身地を聞くなんておかしいと思わんか!!」

「さあな、出身地を聞きたい気分だったんじゃないか？」

「んなわけあるかあっ!？」

両者は互いに引くことなく漫才のようなやり取りを続けていたが

「ああ!!もぅいいや、とにかくジイさんは老婆心の塊みてえな顔して待つといてくれ!!
じゃあな!!」

「だれが老婆心の塊じゃ!?!って待て!!レックス!!レックス!!」

レックスが無理矢理に話題を終わらせ、走り去っていくことで決着がついたのであった。

そんなこんなで準備を進めてレックスは急いでバーンの言っていた右舷うげんの栈橋さんぼしに向かっていた。

「あれは……ウズシオか？」

栈橋さんぼしに近付いて停泊している船が見えてきてレックスは内心驚いた。

「へえ、会長も太っ腹だな」

「アンタこの船に乗ったことないの？」

ウズシオを眺めていたレックスの後ろから聞き覚えのある声がかけて振り返ると、会長室で会った猫耳少女のニアとそのブレイドのピヤッコが立っていた。

「まあな、俺はフリーのサルベージャーだから基本的にウズシオに乗るのはアヴァリティア商会に所属しているサルベージャー達が乗るんだよ」

「そうなんだ」

「そうだ……ひとつ言い忘れてたが、そのロープを足で踏んでると出航の時に絡まって雲海に引きずり込まれるぞ?」

「ええっ?!」

雲海に引きずり込まれると言われ、ニアは猫のように俊敏しゅんびんな動きでその場から飛び退いた。

「なんてな、嘘だ」

「あ、アンタねえ!!」

「まあそう怒るなよ猫ちゃん、落ち着きな」

「猫ちゃんなんて名前じゃない!!アタシにはニアって名前があるんだよ」

「悪いな猫ちゃん、名前で呼んでほしかったら、あと10年経っていい女になったら呼んでやるよ」

「ムキイ〜!!」

遠回しに子供と言われたニアはレックスに飛びかかるが、レックスは向かってくるニアの頭を抑えて止めたのであった。

「レックス、そろそろ出航するぞ……夜から見張りだから、そろそろ中で休んでろよ」

「了解だ……ほら、猫ちゃん中に入るぞ」

「いい加減猫ちゃんって呼ぶのやめろよ」

「わかった、なら小猫ちゃんだな」

「さらに悪化してるだろそれー!!」

サルベージャーのチームリーダーに言われレックスはニアをからかいながらウズシオの中へ入り、ニアもレックスを追いかけ中へと続き、その後ろをビヤッコがついて行った。

そんな彼らのじゃれ合いをメツとそのブレイド「ザンテツ」、そして長い銀髪の仮面の男「シン」達が静かに見ていた。

? 雲海探査船　　ウズシオ?

出航したウズシオの船内でレックスは、他の者の手伝いをしたりサルベージ道具の点検などをやりながら時間を潰していたが

「今出来ることはやつちまったから暇になったな……目的地に着くのは明日だし、猫ちゃん達と話してくるかな………ついでに見張りの仕事もやるか」

やることをすべて終わらせてしまったレックスは、ニア達の様子を見にきていた。

「どうした猫ちゃん、神妙な顔しちやつて船酔いでもしたか？」

「……別に……ただサルベージャーがたくさん乗ってる船に慣れてないだけだよ」

レックスの問いにニアは素っ気ない態度で答えた。

「そうか……まあ無理せずに疲れたなら部屋で休んでな、その調子だと目的地に着いた頃にはクタクタになるぜ？」

「アタシはそんなにヤワじゃないっ!!……ふんっ」

レックスの言葉を聞いて不機嫌になったのかニアはプイツとそっぽを向いてしまった。

「再度お嬢様が申し訳ありません、レックス様」

「まあ気にするな……このくらいの子供はツンツンしてた方がかわいいもんさ」

「……………子供って言うな」

レックスの子供という言葉に小さな声で反論したニアであったが、異性からかわいいと言われたのが恥ずかしいのか頬を赤く染めていた。

「改めまして……此度の依頼こたびが完了するまでの間、お嬢様共々よろしくお願い申しあげます」

「よろしくな……お前もしっかりご主人を守れよ」

「もちろんです」

そうしてニアとビャッコのもとから去ったレックスは階段を登り、船内の二階へ上がった。

そのまま見張り台を目指して甲板まで上がろうとしたが、雲海を眺めているシンの姿が視界に入り一応挨拶だけはしておこうかと思いいレックスはシンに話しかけた。

「よお、調子はどうだ?」

「……………リベラリタスの出身なのか?」

「あ?……ああ、イヤサキ村で暮らしてたぜ……一応な」

「一応?」

レックスのセリフを聞いて疑問に思ったのかシンは聞き返した。

「イヤサキ村で育ったけどよ物心ついた頃に、イヤサキ村を離れて別の所で暮らしてたんだよ、俺が15の時に一度帰ったけどすぐ飛び出しちまってな」

「……………そうか」

レックスの過去の話を聞いてシンがそう言うと、レックスは気まづくなつたのか足早とその場をあとにした。

「よお、坊主^{ボウズ}」

「ああ?」

甲板に出て見張り台に行こうとしたレックスを呼び止める声が聞こえ、振り返ると黒い防具を身につけたメツと異形の人型ブレイドのザンテツが立っていた。

「アンタらか……なんか用か?」

「別に用はねえけどよ、ザンテツが坊主ボウズに興味が湧いたみてえでな」

「こいつが?」

「おいおい、いきなりこいつ呼ばわりか?このザンテツ様をよお」

こいつ呼ばわりされて怒ったのかザンテツはレックスに反論した。

「自分を様呼びか?ナルシストかよお前」

「テメー!!このザンテツ様に喧嘩売ってんのか?そうだよな!!」

「やる気か？俺はいつでもいいぜ、かかってこいよトカゲモドキが!!」

「上等じゃねえか!!」

そして、ザンテツとレックスがそれぞれの武器に手をかけたその時

「よせ、ザンテツ」

「メツ!!止めるなよ、こいつだけは俺様が倒さねえと気が済まねえんだよ」

「…………ザンテツ、俺達の目的を忘れるな」

「……………チツ」

メツに止められ、ザンテツはしぶしぶ武器をしまった。

それを見てレックスも大剣の柄から手を離れた。

「悪かったな坊主^{ボウズ}」

「気にしてねえよ……それで？お前らの目的ってなんなんだ？」

「そいつは言えねえな、そのために大金出してんだ……詮索はしないでもらおうか？」

「……………分かったよ、なんでも屋の頃にはそんな依頼をいくつも受けたことがあるからな……余計なことに首突っ込んで死にたくねえしな」

そう言うのとレックスは、ヒラヒラと手を振りながらその場から去ると見張り台へと続く階段を登っていった。

「モネルさん、交代の時間だぜ」

「おつ……やつと来てくれたか、ようやく一息つけるぜ酒盛りでもして英気を養わなきやな」

「あんまり飲み過ぎるなよ？」

「そいつは無理な話だな、それじゃ雲行きが怪しいが見張り頼むぜ……何かあれば呼んでくれ酔っぱらいがすぐに駆けつけるからよ」

「はいはい……はあ〜」

見張り係のモネルはレックスに双眼鏡を渡すと足早と降りて行った。

そんな彼を見送ったレックスは、ため息をひとつ吐いて周囲の状況を双眼鏡を覗きながら見渡した。

「ん？……あれは……港にいた黒い船か？」

双眼鏡を覗きながら周囲の警戒を続けていたレックスだが

不意に船の後方を見ると、アヴァリティア商会で見かけたあの黒い船が居たのであった。

「ついでにきてるのか？」

「何だよ、結構寒いな」

「あ?……猫ちゃん」

「……もういいよ猫ちゃん」

レックスが後方の黒い船を確認すると同時に、下からニアが上がってきたのであった。

今だ猫ちゃん呼びするレックスに諦めたのかニアは訂正しようとはしなかった。

「そんなことより下で酒盛りが始まったんだ、ちよつと付き合え」

「猫ちゃんは酒は嫌いなのか?」

「酒は嫌いじゃない……けど酔っぱらいは嫌いだ」

「ああ……分かるぜ、その気持ち……酔っぱらいつてのは絡まされると面倒くさいからな」

レックスはそう言いながら、肘を手すりに掛け寄りかかりながら夜空を見上げた。

「そういやサルベージャーの合言葉つてので、船には酔うな酔うなら酒だ……なんて言葉があつたな」

「ふんつ、くつだらない転職する気も起こらないよ」

「それは俺も同感だ」

「同感つて……アンタもサルベージャーなんだろう」

「サルベージャーの仕事は暇つぶしの副業でな、俺の本業はなんでも屋だ……だからサルベージャーの合言葉を聞くつもりもねえし守る義理もねえつてことさ」

「アンタは……」

「レックスでいいぜ」

「…レックスはなんで副業でサルベージャーの仕事をやってるんだ？」

「あれだ」

そう言うのと、レックスは世界樹に視線を向けた。

「世界樹………がどうかしたのか？」

「俺は世界樹に辿り着くための道具か何かを手に入れるためにサルベージャーをやってるんだよ、なんでも屋も情報を集めるために始めたものだからさ」

「そうなんだ………でもなんで世界樹なんかを目指してるんだ？」

「世界樹の上に楽園があるかどうかを確かめるためだ」

ニアの問いにレックスは世界樹を見据えながら答えた。

「楽園って………アンタ、マジで信じてるの？楽園伝説なんて………アレはただのデツカイ

樹だよ」

「まあ、普通はそうだよな笑われて当然だ……だがな」

楽園の存在について小バカにするように言うニアの言葉にレックスは頷いたが、右手で手摺りの部分を握りしめながら世界樹を睨みつけた。

「俺にはどうしても行かなくちゃいけない理由がある、こんなクソみたいな世界を作つてずっと俺達を見下ろしてやがる居るのかどうかも分からねえ神に会いに行くんだよ」

「……………あ、会ってどうするのさ？」

レックスの怒気に怯えたのか少し震えたニアは、おそろおそろどうするかを聞いてみた。

「殺す」

「っ!？」

「神を殺す、それを邪魔するヤツらがいるならそいつらも全員殺す……それだけだ」
冷酷に殺すと宣言するレックスにニアは恐怖した。

今まで見てきた人間の中でも一番危険なヤツだと彼女は感じていたが、何故かこのままほっとけない人間だとも感じていた。

レックスは世界樹を睨みつけていた表情から一変して、いつもの優しく笑みを浮かべた表情に戻るとニアの方へと振り返った。

「でもまあ神を殺すこととはついでなんだけだよ、本命は楽園が本当にあるのかも確認するのが目的だ」

「……なんで?」

「楽園があれば皆でそこに移り住んでのんびり暮らせるじゃねえか……そしたらくだねえ理由で戦争をしなくてよくなる……なんて夢みたいないな目的さ」

「…レックス」

レックスの言葉を聞いてニアは、彼が本当は心の優しい人間なのだと思った。

「人間ってのはもつと自分勝手な生き物だと思つてたけどね……レックスつて親は？」

「いない……というより生きてるのか死んでるのかも知らねえんだ」

「えっ……」

「俺、捨て子だったんだ……イヤサキ村の入口の前に黒い布に包まれた赤ん坊だった頃の俺が置かれてたってジイさんから聞いたことがある」

「ジイさんつて？」

「俺の育ての親でな、俺がちよつと無茶しただけでいつも口うるせえのなんの……でも俺を育ててくれた恩人だ……人間じゃねえけどよ」

「人間じゃない？……ん、なんだかよく分かんないけど、そのジイさんとかに感謝し

なよ」

そう言うと、ニアはレックスの隣に並びレックスと一緒に世界樹を見上げた。

「アンタ、悪くないよ……アタシと一緒にだな……」

最後にニアはポツリと呟いたが、その言葉がレックスに聞こえることはなかった。

「さてと特に異常もねえし、俺も酒飲んで寝るかな」

「あれ？アンタって酒飲めたの？」

「嗜^{たしな}む程度だけだな、〃ニア〃も来るか？」

「いやアタシは……って今アタシの名前っ!？」

「おっと、酒が無くなったら困るからな先に行かせてもらおうぜ」

「ちよつとレックス!!今アタシの名前呼んでくれただろ、なあ!!」

誤魔化すようにそそくさと立ち去ろうとするレックスを追いかけたニアだったが、突
然レックスが振り返るとニアの後ろの空を指差した。

「なんだあれ」

「えっ?」

「ほいつ」

「ヒニャアアン!」

指を差した空を見るために振り返ったニアの背後から、レックスが彼女の頭部に生え
た猫耳をフニツと揉むとやや艶かしさが含まれた甲高い悲鳴を上げた。

「ハツハツハ、いい声だぜ猫ちゃん」

「ごんの〜!」

「おつと怒らせたか？」

「待てこの〜!!」

二人はドタバタと音を立てながら酒盛りの会場へと向かっていった。

そして、誰も居なくなつた見張り台には静寂せいじやくとレックスが握りしめて大きくひしやげた手摺りのみが残された。

第二話 終焉

「現地到着!!各作業員は持ち場に着け!!サルベージャーは装備を整えてハッチに集合!!」

サルベージャーに備えてサルベージスーツを着たまま睡眠を取っていたレックスは、チームリーダーの号令により目を覚ました。

レックスは、近くに置かれたサルベージヘルメットを脇に抱え足早に集合場所に向かったのであった。

数分後には、ハッチ前にサルベージャーが全員集合しておりチームリーダーが引き揚げ作業の手筈を説明が行われそれぞれが持ち場に着こうとしていた。

「高い金払ってんだからしつかりやれよ、あとレックス気をつけなよ」

上の階からニアがそう言うのと、レックスはニアにむけて親指を立ててサインを送ると雲海に向かいチームリーダーの潜行の号令とともに雲海に飛び込んだ。

サルベージャー達がしばらく潜り続けていると、何やら大きな物体が見え始めレックスはその物体を観察していた。

「あれか……想像していた物よりずいぶんデカいな、かなりの年代物だ……それにアレは推進器か？いずれにしても見たことのない船だな」

レックスが観察して分かったことは、引き揚げる物体が想像よりも大きな船でありその構造が今まで見たことのないものであるということであった。

そして、観察もそこそこにやめてレックスを含めたサルベージャー達はフロートと呼ばれるバルーンのように膨らんで沈んだ物体を持ち上げる道具をそれぞれ手にすると、沈没船の両サイドに等間隔になるようにフロートを取り付けてその場から離れた。

サルベージャー達が離れるのと同時にフロートが大きく膨らみ沈没船が軽く浮き上

がった。

そこをすかさずクレーンがガツチリ掴むとゆっくりと浮上していった。

「お、大きい」

浮上し終えた沈没船を見たニアはその大きさに驚いていた。

「見てくれは情報通りだな、問題は中身……か」

「……………」

メツは沈没船を見て何かを気にするようなことを呟き、シンは何も言わず静かに沈没船を見据えていた。

「お、いい、レックス」

「ん？…猫ちゃんか」

浮上した沈没船の甲板で機材の箱を降ろしていたレックスが名前を呼ばれ、そちらへ目を向けるとウズシオから橋をかけて沈没船に乗り込んでくるニア達の姿が見えた。

「見事な手際だった、なかなかやるじゃない」

「ふっ、ありがとうよ」

「各班、準備が出来た者から侵入開始」

「さて、俺達も行くか」

レックスとニアが軽く言葉をかわしていると、チームリーダーからの号令が聞こえメツ達も船内に向かい始めた。

「……お前も来い」

「あ?」

「レックスも連れて行くって言うの? シン」

しかし、不意に振り返ったシンが突然レックスについてこいと言って呼ばれた本人は怪訝そうな表情を浮かべた。

ニアも突然の事で驚きながらもシンに聞き返していた。

「お前らだけじゃ不安だとよ」

「なっ!? ……くう」

「ハッハッハッ」

聞き返したニアに対してメツが遠回しに子供扱いするような事を言うと、ニアは悔しそうに地団駄を踏みながらメツを睨みつけたがメツは気にも止めず笑い飛ばした。

「あゝ、ついて行くのは別にいいんだけどよ一ついいか?」

「…………なんだ？」

「着替えて来てでもいいか？俺サルベージスーツ嫌いなんだよ、それに濡れて肌に貼り付いてるから気持ち悪くて仕方ねえ…………あと装備もな」

「…………急げよ」

シンがそう言うのと、レックスは着替えと装備を取りに行くためにウズシオの船内へと入っていった。

しばらくしてアヴァリティア商会で着ていたジーパンと紺色のコート姿に着替え、大型リボルバーと大剣を装備したレックスが戻ってきた。

「よう、待たせたな」

「遅いぞレックス」

「まあそう怒るなよ、猫ちゃん」

「……行くぞ」

レックスが戻つてくると共にニアから文句を言われたが軽く受け流した。

そしてシンの言葉と共にレックス達は沈没船の内部に入るために入口へと向かった。

? 古代船?

レックス達が入口に近付いていると不意に入口の扉が内側からこじ開けられようとしていた。

不審に思いレックス達が足を止めた瞬間、扉が吹き飛ばされ中から甲殻類と昆虫をかけた。合わせたようなモンスターが出てきて、ギョロリと動く四ツ目がレックス達を見ていた。

「気色悪い出迎えだな」

「下がってなレックス、ドライバーの力見せてやるよ」

そして、ニアは腰に下げていた二つのリング状の武器“ツインリング”を両手に持ち構えるとリングの周りに青色の刃が形成された。

対してレックスは、背中から大剣を抜くこともせず、軽く体勢を整えるだけであった。

「そいつの相手は任せるぜ？ニア、坊主」ボウズ

「……………」

「ちよつ!?!メツも戦えつての!!」

「坊主ボウズの実力を測るいい機会だ、頑張れよ」

そして、メツとシンは二人の少し離れた後ろから見学をしていた。

どうやらレックスの実力を測るために戦闘には不参加のようである。

「あゝつ、もう!!行くよビヤッコ!!レックス!!」

「承知!!」

「オーケー!!」

「グルブブウツ」

ニアの掛け声にビヤッコとレックスが答えるのと同時に、四ツ目の気色悪いモンスター”キングリター・シース”が襲いかかってきた。

キングリターは手始めにニアに向かって飛びついてきた。

しかし、ニアは横に跳んでかわしつつ体を回転させながらツイニングでキングリターの側面に連続して斬撃を叩き込んだ。

だが

「かったあく!？」

「ブググウ!!」

「しまった!？」

兜のように全身を覆うキングリターの甲殻を切り刻むことは出来なかった。

あまりの硬さにニアはツインリングを握っていた手に伝わる痛みに悶絶していた。

そんな隙を見過ごすわけもなくキングリターは鋭く尖った前足をニア目掛けて突き出した。

「お嬢様!!」

ニアが鋭い前足に貫かれる前にビヤッコがニアの前に割り込み、大きな咆哮を繰り出すとシールドが展開されて攻撃を防いだのであった。

「助かったよビヤッコ!!今度はこっちの番だ!!~~ジ~~エミニループ~~!!~~!!」

ビヤッコに助けられたニアはすかさずツインリングをキングリターに向かって投げつけ、四ツ目のうち外側両サイドの目を斬り裂いた。

「グブギャア!?!」

四ツ目のうち2つを切り裂かれ、キングリターは苦悶の声を上げた。

そして、ニアの投げたツインリングはまるでブーメランのように戻ってきていた。

「派手に行くよビヤッコ!!」

「了解です!!お嬢様!!」

ニアはビヤッコに声をかけビヤッコが答えると二人は同時に走りだし、ブーメランのように戻ってきていたツインリングの片方をニアが手で掴み、もう片方をビヤッコが口に咥くわえて構えるとキングリターを同時に斬りつけた。

「☒メールシュトローム☒!?!?!」

「グブブウ!?!」

怒涛どとうの攻撃に怯んだキングリターはニアを襲うことを諦めると標的を変え、今度はレックスに向かってきた。

だが選んだ相手が間違いであった。

「気色悪いんだよ!!」

レックスは向かってくるキングリターの残りの目に向かって容赦なく大型リボルバーの引き金を引いた。

放たれた弾丸は残った目を貫き、キングリターの視界は完全に潰された。

「Blas^{吹っ}t^飛!!」

「グブウ!?!」

そして、逆手に持った大剣を勢いよく振り上げ斬り上げた。

レックスの大剣はキングリターの硬い甲殻をもともせず、軽々と砕き割っていた。

甲殻を割られたキングリターは断末魔をあげながら、吹き飛ばされひっくり返ってしまった。

「くたばりやがれっ!!」

「グギアアッ!？」

さらにレックスは大きくジャンプしてひっくり返ったキングリターの上に飛び乗りながら大剣を深々と突き刺した。

そして傷口を広げるように何度も何度も大剣をグリグリと捻り、最後に突き刺したまま大剣を振るい頭を真つ二つに切り裂いた。

「ふうっ」

「結構エゲツないね、アンタ」

「そうか？」

動かなくなったキングリターの死骸を踏みつけながら大剣についた血を振るい落とし背中にも背負い直したレックスに、ニアは顔を引き曇らせていたがその本人は平然としていた。

「おっ、終わったぜ」

キングリターを倒し終わったレックスは、離れて見ていたメツとシンに声をかけたが、二人は真剣な表情をしていた。

「どう思う？あの坊主の動き」

「あの大剣を片手で持ち、なおかつあの身軽な動き……あきらかに人間に出来る動きではない」

「……とするとあの坊主は……」

「……おそらく……」

「おい!!聞こえねえのか?来ねえなら先に行かせてもらおうぜ!!」

シンが何かを言おうとしたその時、しびれを切らしたレックスがかなりの大声でメツとシンを呼ぶと先に船内へと入って行ってしまった。

「とりあえず話はあとだ」

「ああ」

そう言って、二人は古代船の中へと向かって行った。

船内はひどく劣化が進んでいるものしつかりとした作りをしていた。

「ひどく傷んでるが、それでも状態がいいな」

「うわあ、すつこい」

レックスが歩きながら船内の状態を冷静に分析している横で、沈没船の内部というものを初めて見たニアはその風景に驚いていた。

しばらく下に向かって進み続けると広い空間に出た。

「ここは……倉庫か何かか？」

「みたいだね」

レックスとニアが周囲を見渡しながら歩き、少し後ろからメツとザンテツ、シンが付いてきていた。

そして、レックスとニア倉庫中央のフェンス状になっている床部分の上に差し掛かったその時

「うおっ!？」

「レックス!？」

老朽化していたのか床の一部が抜け落ち、レックスだけが下の階に落ちてしまったのである。

「おい!!大丈夫かレックス!!」

「問題ない、そんな高くなかったしな……ただモンスターの寝床だったのかウジャウジャ湧いてきやがった」

そう言いながらレックスが周りに視線を向けると、ヤドカリのような姿をしたモンスター”レクター・クライブ”とクラゲのように空中を浮くモンスター”バブル・ジェリー”がどこからか現れ取り囲んでいた。

「とりあえず俺はこいつらと遊んどくから、お前らはゆつくり来いよ」

「何言つてんだよ、すぐに行くから……」

「ゆつくりでいいんだよ、久しぶりに大剣コイツを暴れさせねえといけねえしな」

そして、レックスが大剣の柄を握り大きく捻ると重厚なエンジン音が響き渡った。

「す、すごい」

「かなりの実力者だとお見受けしていましたがこれ程とは」

レックスの元へ向かっていたニアとピヤッコであったが、二人とも啞然とした表情で見つめていた。

それもそのはず

「Let's rock!!」
派手に行くぜ

重厚なエンジン音を響かせながら火を吹き出す大剣を豪快かつ華麗に振るい、群がるモンスター達を殲滅するレックスの姿があった。

「オラオラどうした!!ガッツが足りねえぞ!!」

「ギギイツ!!」

「ブグギヤアツ!!」

「へっ!!そうこなくっちゃ……なあ!!」

数回大剣の柄を捻り刀身を赤く発光させるとレックスは武器を構え、地面を蹴り向

かってくるモンスターの群れに突っ込んでいき

「One!! t wo!! c r a z y!!」

横に大剣を振るうと同時に大剣から火が吹き出し、その推進力を活かして一回、二回、三回と回転しながら斬りつけモンスターの群れを吹き飛ばした。

「ふう〜」

「なかなかの腕だな」

モンスターの群れを薙ぎ払い一息ついたレックスの後ろから、ニア達を引き連れたシンが話しかけてきた。

「いや、別にたいしたことじゃねえよ…… “ヤツら” の相手に比べたらぬるいもんさ…… おっと今のはただの独り言だ、さっさと進もうぜ」

「……………」

ポツリと呟いた一言をレックスは独り言だと片付け、先へと進んでいった。

そんなレックスの後ろ姿をシンは黙って見ていた。

特に敵に遭遇することなく船内を進んでいたレックス達一行であったが、途中巨大なシリンドラーのようなものが立ち並ぶ奇妙な空間に辿り着いたのであった。

「なんだここは?……見た感じシステムの中核っぽいな」

「レックス!!これ動かせるんじゃない?」

ニアと呼ばれ、そちらに目を向けると何やらレバーのようなものが部屋の真ん中にドーンと鎮座していた。

その上、レバーの正面には操作すれば開きそうな巨大な門があった。

「んっつ!!う、動かないっ!!」

「貸してみな」

ニアの小さな体では難しいと考えたレックスが、ニアに変わってレバーを操作するがウンともスンとも言わず、周囲にあるボタンを適当に押して再びレバーを操作するが反応がなかった。

「チツ!!」

思うように動かずイライラし始めたレックスがレバーの台座に蹴りを入れ

「このポンコツがつ!!」

「ちよっ!?!」

なんとレバーの台座に向けて大型リボルバーを構えると、ズドンツと重々しい銃声と共に発砲したのであった。

「何やってんのレックス!?!」

「何って、動かねえから壊したんだよ」

「壊しちゃったら先に進めないじゃんか!!」

「知るかよ、んなこと」

先に進めなくなつてしまいニアとレックスが口論していると、ショートしてしまつたのか撃ち抜かれたレバーに電流が走りひとりでに動くと言つた音と共に正面の門が左右に開いたのであつた。

「……開いたな」

「……ウソオ」

「なにバカやってんだ、さつさと進め」

レックスとニアはお互い目の前で起きた出来事に対して信じられない様子ではあつたが、メツに急かされ二人は開いた門へと向かうのであつた。

「グルルアア!!」

開いた門を通り過ぎたレックス達の前にサメに足が生えたようなモンスター”メガロエツジ・ディブロ”が立ちふさがった。

「また随分ずいぶんとイカツイモンスターのお出迎えだな」

「ここから先は通さねえってか面白れえ、ここからは俺も戦うぜ」

「せいぜい足引つ張んなよ」

「ほざいてな坊主ボウス」

「はあく、つたく男つてのはなんでこうなのかな?」

メガロエツジを前にレックスとメツは互いに軽口を叩きながら武器を構え、そんな二人を見て呆れたようにため息を吐いたニアも自身の武器を構えた。

そして、シンは後ろで腕を組みレックス達の戦いを観戦していた。

「グルアア!!」

「へえ、デカイ図体のわりに結構速えじゃねえか」

「ニヤアっ!!」

「おっと!？」

先制攻撃はメガロエツジから仕掛けられ、鋭い歯が生え揃った大口を開きながら床を滑るように突進してきた。

それに対してニアとメツは左右に分かれてかわし、レックスは大きくジャンプしてメガロエツジの上を飛び越えてかわした。

「グルウツ!!」

「つと!!おいおいその程度か?」

ジャンプしてかわしたレックスにメガロエッジは尾ヒレを横に振るい叩きつけようとしたが、レックスは迫る尾ヒレに蹴りを入れてさらにジャンプしてかわしたのであった。

「☒ジャガースクラッチ☒!!」

「グギャツ?!」

レックスに攻撃が集中している隙に、ニアが両手に持ったツイニングを回転させながらメガロエッジの頭を斬りつけた。

攻撃をくらったメガロエッジは怯んだが、攻撃をしてきたニアを食い千切らんとすぐに大口を開けて襲いかかった。

「☒ハンマーバッシュ☒!!」

しかし、ニアに襲いかかってきたメガロエッジの横顔をメツがシールド状に変形させた武器で殴り壁に叩きつけた。

「ザンテツ!!」

「おうよ!! ☒ ストームエッジ ☒ !!」

そしてさらに、メツがザンテツに武器を投げ渡すと鎌鼬かまいたちの竜巻を発生させてメガロエッジを包み込んだ。

「グルルア!!!」

「俺様のストームエッジをつ!!」

だが、タダでやられるメガロエッジではなく咆哮ほうこうと共に体を回転させて尾ヒレで薙ぎ払いストームエッジをかき消したのであった。

驚き動きを止めたザンテツに向かってメガロエッジは口から水の塊の大砲を吐き出し攻撃した。

「させるかよっ!!」

しかし、吐き出された水の塊はメツによって縦に切り裂かれ左右に分かれてメツとザンテツを通り過ぎた。

「Double down!!」

水の塊を吐き出した隙を狙いレックスが上からメガロエッジの脳天目掛けて、火を吹き出して推進力で加速させた大剣を突き刺した。

「グギャアツ!!」

「大人しくしてな、テメエの脳天をカチ割れねえだろうが!!」

そう言いながら、痛みで暴れるメガロエッジの頭に立ち続けるレックスは何度も何度も大剣を脳天に叩きつけた。

叩きつけると同時に柄を捻り、エンジン音と共に大剣からは火が吹き出していた。

「いい加減に……くたばれっ!!」

最後に大剣を深々と突き刺し、切り裂くように振るいながら大剣を引き抜くとレックスはメガロエッジの頭から飛び降りた。

大剣にこびりついた脳片や滴る脳漿（のうしよう）を振るい落とし背中に背負うと共にメガロエッジは倒れ、それからはピクリとも動かなくなった。

「ふん、手こずらせやがって……サメモドキが…」

「うぷっ!!?」

「お、お嬢様?!?大丈夫ですか?!?」

激しい抵抗を続けたメガロエッジにレックスが悪態をつく横で、脳漿のうしようをぶちまけるバ
イオレンスなトドメシーンを見てしまったがゆえにニアが吐きそうになっており、傍に
いたビヤツコが背中を擦さすっていた。

「おい、大丈夫か?猫ちゃん」

「これが大丈夫に…見えるか…うえっ…ばかあゝ」

「……っ?!?レックス様!!!」

具合を心配するレックスにニアが弱々しく答えた時、レックスの背後に気づいた
ビヤツコが大声を上げた。

「グギャガアアッ!!!」

なんと死んだと思われていたメガロエツジが再び動き出しており、大口を開けてレックスとニアをまとめて喰らおうと飛びかかってきていたのだ。

「…えっ……」

迫るメガロエツジを見てニアは一瞬思考が止まり、その場から動けなかった。しかし、レックスだけは違った。

「しぶてえな……それに……」

背後から迫るメガロエツジにレックスは苛^{いら}立ちの感情を隠す様子も見せず、包帯の巻かれた右拳を握りしめて

「デメエ、口がクセエんだよ」

メガロエツジの鼻先を右拳のアップercutで殴り上げた。

「…はえ？」

「なっ?!」

ニアとビヤッコは目の前の光景が信じられなかった。

それもそのはず人間の力で巨体のメガロエッジを殴ったところで逆に殴った方がケガをするはずなのだが、レックスが繰り出した拳を受けたメガロエッジは体ごと頭が大きく上に跳ね上がったのであった。

そして、跳ね上がったメガロエッジの頭を追うようにレックスもジャンプして右腕を構えると

「一生閉じてろっつ!!!」

力の限り右拳を振り下ろし、跳ね上がったメガロエッジの頭を床目掛けて殴り落とした。

メガロエッジの頭は床に叩きつけられるだけにとどまらず、床を突き抜け深々と床下にまでめり込んでいた。

「ちっつ?!バッチイな」

完全にメガロエッジにトドメをさしたレックスは、右腕についた脳片や脳漿のうしようを顔をし

かめながら振り落していた。

「レックス!? アンタ、メガロエッジ殴って拳大丈夫なの!? っていうかアンタの拳どうなってんの!?」

「えっ? ……あ…」

ニアにそう言われてレックスはそこでようやく自分が右腕を使ってしまったことに気が付き、そつと包帯の巻かれた右腕を体の後ろに隠した。

「なんともねえよ……心配すんな」

「でもっ……!!」

「なんともねえつつてんだろ!!!」

大丈夫だと言い張るレックスに対してそれでも心配するニアだったが、レックスに怒鳴られ体がビクツと震わせた。

「……………わりい」

「…レックス……」

つい怒鳴ってしまったレックスは、ハッと我にかえると一言謝ると奥へと進んで行ってしまった。

そんなレックスの背中をニアは見届けることしか出来なかった。

「なにしてんだ、行くぞ」

「……………うん」

「お嬢様」

「アタシは大丈夫……………行こうビヤッコ」

メツに呼ばれ、ニアとビヤッコも通路を進み出した。

少し進み続けると、一行は頑丈そうな巨大な扉の前に到着した。

「見ろよシン、あの紋章。『アデルの紋章』だ」

「アデル？」

メツの言ったアデルという名前を聞いてレックスは首を傾げた、何かの文書で見たことがあったようななかったようなと思いついて出そうとしていると

「おい、その扉を開けろ」

「は？」

「この扉は、お前達でなくては開かん」

「俺達？………いつたいどういう………」

「いいからさっさとやれ!!こっちは大金払ってんだぜ!!」

「……チツ」

シンの言葉の真意を聞こうとしたレックスだったが、何故だかイライラしていたメツに急かされたレックスは舌打ちしながらも言われた通りに足を進め、扉の前までやってきた。

そこでレックスはとある疑問に突き当たった。

「(どうやって開ければいいんだ?)」

扉の明け方がまったく分からないのであった。

とりあえずはと思い、レックスは数十歩ほど後ろに下がると突然扉に向かって走り出し

「ウオラアアツ!!!」

扉の前でジャンプして身体をひねり全体重を乗せた回し蹴りを叩き込んだ。

しかし、回し蹴りが直撃した扉は表面がわずかにへこんだ程度の損傷しかなく、ビクともしなかつた。

「クソツ!! 開かねえか」

「いやいや!! なにやってんのレックス!？」

「あ? なにってただ扉を開けようと……」

「普通に開けようとすればいいじゃん!!」

「だからその開け方が分からねえんだよ!!………つたく」

開け方が分からずレックスとニアが言い合いを始めるが、気を取り直したレックスが言い合いをやめて再び扉の前に向かっていった。

「マジでどうやって開ければいいんだ?………ん?」

振り出しに戻りイラついていたレックスだったが、右腕に違和感を感じて見ると右腕に巻かれた包帯の下から淡い光が漏れ出していた。

そして不意に視線を上げて前を見ると、扉に刻まれた紋章部分も右腕と同じく淡く光っていた。

「……………まさか」

淡く光る右腕と扉の紋章を交互に見ながらも、レックスは右手を扉の紋章に触れさせた。

すると扉に光のラインが走ると共に、扉がゆつくりと開き始めたのであった。

「(紋章のところがスイッチだった……………のか?……………まあなんでもいいか)」

紋章に触れただけで扉が開いたことにレックスが違和感を感じていたが、すぐに思考を切り替えた。

扉を開き奥へ進むレックスについていこうとニアが駆け寄るが

「待て」

シンに声をかけられ、レックスとニアは立ち止まり振り返った。

「奥に、もうひとつ扉がある」

「開ける……ってか？分かったよ」

シンにそう言われ、レックスはしぶしぶといった感じで奥の扉に向かい、ニアも結局それを見守ることにしたのであった。

「(……:まただ)」

奥の扉にレックスが近付くと、再び包帯の巻かれた右腕から淡い光が漏れ出し始めていた。

「忌々しい腕だ」

レックスは自身の右腕を睨みながら吐き捨てるようにそう言いながら、右腕を紋章に触れさせて最後の扉を開けたのであった。

最後の扉を開けると、そこは今までの部屋とは違った雰囲気の良い空間があった。

沈没船なので電力などのエネルギーなどないはずだが、部屋の床の一部がまるでライトのように光り輝いていた。

レックスはその部屋に先行して入ってきた。

「あ？……なんだアレ」

入ってすぐにレックスは、部屋の中央に鎮座するカプセルと赤い片刃の大剣に気が付いた。

「……女？」

カプセルの近くに寄りあらためてカプセルの中を見たレックスはポツリと呟いた。

カプセルの中には一人の女の子が胸元で手を組むようにして眠っていた。

そして不意に何かを感じ取ったのかレックスが視線を落とすと、台座に突き立てられた赤い片刃の大剣に埋め込まれている十字架の形をした翠玉色のクリスタルから光が放たれていた。

そこへ遅れてシン達が部屋の中へ入ってきた。

「……おい」

「ああ……間違いない…… “天の聖杯” だ」

「天の……聖杯……？」

メツとシンの会話を聞いていたニアはそう言いながら、カプセルに眠る女の子を見つめていた。

その時、レックスはシン達の存在に気づかず、無意識のうちに翠玉色のクリスタルに右手を伸ばしていた。

「っ!?!……坊主!!^{ボウズ}そいつに触るんじゃねえ!!」

「あっ……」

メツと呼ばれレックスが反応するが時すでに遅く、右手は翠玉色のクリスタルに触れてしまったのであった。

その瞬間、クリスタルは強く輝きレックスの周りに翠玉色の粒子が舞い散った。

「なんだ……っ!？」

突然の出来事にレックスは驚くが、さらに驚くべき問題が発生した。なんと舞い散った翠玉色の粒子が右腕に吸収され始めたのである。

「これは……はっ!？」

右腕の異変に驚くレックスであったが背後からの殺気に気付き、振り向きながら背中の大剣を引き抜き振るった。

「……………」

「デメエ……………」

ガキインツと金属同士がぶつかり合う音と共にレックスが殺気を放った相手を見ると、なんと太刀を手にしたシンであった。

「なんのつもりだ……………いきなり攻撃して来やがって」

「……………」

「なんとか言いやがれ!!」

なにを聞いても沈黙し続けるシンに苛立ったレックスが大剣をシンに振るうが

「なにっ!?!」

なんとシンは目の前からすでに消えており標的を失った大剣は床へ深々とめり込んでしまった。

「いったいどこに……………がつ!?!」

目の前から消えたシンを探そうとしたレックスを背後から衝撃が貫いた。

レックスが胸元に視線を下ろすと、そこには胸を貫いて飛び出した太刀があった。

「……………なんだよ……………これ」

「悪く思うな、せめてもの情けだ……………この先の世界を見ずとも済むようにな……………」

そう言いながら、突き刺した太刀を反転させて肉を抉えぐると太刀を引き抜き血を振るい

落とした。

そしてレックスは胸から血を流しながら前のめりに倒れた。

倒れたレックスを見たシンは振り向き、台座に突き立てられた赤い大剣を太刀の一閃と共に砕き割ったのであった。

「チツ!!余計な手間を……」

「シン!!!」

予想外のアクシデントを起こしたレックスに舌打ちするメツの隣からニアが悲痛な表情をしながらシンに駆け寄っていった。

「なんで殺した!!レックスが…何をしたっていうんだっ!?!…シン!!!」

ニアの悲痛な叫びを浴びせられたシンはなにも答えることなく無言で部屋から出ていったのであった。

「……レックス」

部屋から立ち去ったシンを見ていたニアがレックスに駆け寄るが、すでに息絶えてい

た。

「レックス……ごめん……ごめんね」

ニアは息絶えたレックスの手を握りながら、もう届かない言葉を呟き続けた。

「聖杯を運び出すぞ……ニア、モノケロスを呼べ」

「……………」

「チツ!!…ニア!!
!!!」

「……………分かったよ」

メツに呼ばれ、ニアは目元を袖で拭ぬぐうと立ち上がり

「さよなら……レックス」

最後にレックスに向けてニアはそう呟くと、部屋から去っていくのであった。

第三話 運命

『…ツクス……んね…約束…れな……』

「うう……」

頭の中にあの日の記憶が鮮明に焼き付き、レックスを苦しめ続けていた。

目の前で大切な人を失ったあの日の記憶を

「行く…な……一人に…しないで…くれ……キ……エ……はっ!？」

うなされていたレックスは、ふとした瞬間に意識を取り戻し身体を起こした。

「はあ…はあ……またあの日の夢か」

息を整えながらレックスが顔を上げると

「どっだ……」

見たこともないような草原が広がっていた。

草原ぐらいなら自然豊かな巨神獣アルスに行けば見ることも出来るが、どうしても巨神獣アルスの

体の一部が見えてしまうものなのである。

しかし、レックスの目に見える草原はそんなものが見えることもなく、どこまでも広

がる草原と青い空が広がっていた。

そんなレックスの耳にどこからか鐘の音が響いて聞こえてきた。

「……………あれは…………？」

周囲を見渡していたレックスは遠くにそびえ立っている木と、その根本に立つ人影に気が付いた。

レックスはゆっくりとした動きで歩き出し、その人影に近付いていった。

木の傍に立つ人影に向かうレックスの耳に、鐘の音が何度も鳴り響いていた。

鐘の音を聞かされたときにレックスは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

「(あの鐘の音……………クソツツ!! 思い出したくもねえ”あの場所”を思い出しちゃう)」
少しイラついた感情を抑えつつも足を進め続けていた。

そして、レックスは木の所へ辿り着き

「なあ……………アンタ……………」

「^{かな}哀しい音……………」

「ああ……………」

「止まないの……………ずっと、ずっと昔から……………」

「鐘の音が……………あんまりいい思い出はねえな……………それよりここは……………」

木の根本に立っている少女に声を掛けたが、突然少女が話し始めたので少し驚いた。レックスだったが気を取り直して再び少女に声を掛けるのであった。

「ここは……楽園……遙かな昔、人と神が共に暮らしていた場所……」

「……はっ？」

「そして……『私達』の故郷……」

「ここが……楽園？」

驚くレックスは少女の隣に並び、その下に広がる景色を目にした。

澄んだ色をした湖を中心に地平線の彼方かなたまで続く草原、豊かに生い茂る森、その中に
ある小さな村

いままでレックスが見たこともないような世界が広がっていた。

そんな景色を眺めていたレックスは不意に隣の少女に視線を向けると、少女の胸元で
光り輝く翠玉色の結晶に気が付いた。

「コアクリスタル……お前は……ブレイドなのか？」

「私の名前はホムラ」

「お?…ああ…俺の名前は……」

「知っています、レックス…ですよね」

「なんで知って……」

「さっき私に触れてくれた時に……」

「さっき……さっき……」

ホムラにそう言われ何故自分はここにいいのか、ここにくる前は何をしていたのかを思い出そうとするレックス。

そんな彼を見たホムラが呟いた。

「あなたは……死んだ、シンに胸を刺し貫かれて……」

「……シン?…胸を?…つ!」

ホムラの言葉を聞いたレックスは、シンに背後から胸を刺し貫かれた瞬間を鮮明に思い出した。

思わずレックスは貫かれた胸に手を当てた。

「…思い出した……俺はあの野郎に……クソツ!!」

怒りで顔を歪ませたレックスは木に近付き、左拳で木を殴りつけた。

「(こんな所でくたばるわけにはいかねえ!!まだアイツとの約束を果たせてねえのに

「!!」

体を震わせ、何度も拳を木に叩きつけるレックス

そんな彼の背中を見ていたホムラが彼に話しかけた。

「レックス、お願いがあります」

「……………お願い?」

木を殴り続けていたレックスは、拳を止めると視線をホムラに向けた。

「私を……………楽園に連れて行って」

「楽園……………連れて行って頼むってことは、ここは偽物の楽園か」

「はい、ここは記憶の世界……………遠い……………遠い”私達”の記憶の世界」

ホムラは悲しそうな表情でそう言った。

「本当の楽園は、あなた達の世界……………アルストの中心に立つ世界樹の上にあります」

「楽園は本当にあるんだな、世界樹の上に……………なら神も……………」

「……………おそらくは」

「……………そうか……………は……………ははっ」

楽園と神、レックスは自身の求める情報が手に入り嬉しいのか小さく笑い声をこぼした。

しかし、すぐにその表情は歪み悔しそうな表情に変わった。

「でも、もう手遅れじゃねえかよ……俺はもう死んじまったんだろ？ アンタの頼みに手を貸せねえし、俺の目的も果たせねえ」

「私の命を半分あげます、そうすればあなたは生き返る……私の……天の聖杯のドライバーとして」

「生き……返れる……？……それに天の……聖杯？」

「どうします？ レックス」

突然のホムラの提案にレックスは呆然としていたが、ホムラが再度問いかけるとレックスはニヒルな笑みを浮かべていた。

「決まってるんだろ……お前は樂園に行きてえ、俺も樂園に行きてえ……目的は一緒なんだ……連れてってやるよ樂園に!!」

「ありがとう……レックス!!」

レックスの答えを聞いたホムラは優しく微笑むと胸のコアクリスタルに触れた。

「……私の胸に手を」

「……………はっ!？」

突然のホムラの言葉にレックスは動揺してしまい、思わずホムラの豊満な胸部に視線が向いてしまったが

ドクンツ

ドクンツ

脈打つ音を響かせる翠玉色のコアクリスタルを見たレックスは落ち着きを取り戻し、無意識のうちに右腕を伸ばしホムラのコアクリスタルに触れたのであった。

そして、コアクリスタルを中心に翠玉色の光が放たれた。

光はレックスの右腕と胸元に収束されていき、ホムラとレックスの二人は光に包まれた。

シンに心臓を刺し貫かれて床に広がる血溜まりの中に倒れていたレックスの周囲を翠玉色の粒子が舞っていた。

粒子が舞う中、レックスがゆっくりとした動作で立ち上がり握っていた右拳を開くと手の中にはホムラの胸元にあつた十字架の形をしたコアクリスタルがあり、やがてコアクリスタルが光り輝くと一振りの片刃の大剣へと姿を変えていた。

そして、おもむろにレックスは左手でシャツの襟元を掴むと力任せに布を引き千切り胸元が見えるようにすると、シンに貫かれた傷跡を隠すようにXエックスの形をした翠玉色の結晶が姿を見せていた。

「……………っ!!……………こいつは?」

完全に意識が覚醒したレックスは、自身の右手に持っている赤い大剣に気が付いた。

感触を確かめるように軽く振り始めたレックスは、まるで長年使っていたかのように馴染む赤い大剣に驚いていた。

「…へっ!!最高だぜ……さて、あの仮面野郎に借りを返さねえとな」

そう言いながら、赤い大剣を大きく振るうと大剣のパーツが可動して展開されると炎が吹き出して灼熱の刃を作り出したのであつた。

今ここに赤き聖杯の剣を手にして、レックスは完全復活を成し遂げた。

レックスが完全復活していた時と同じ頃

メツがホムラが眠っている棺ひつぎを肩に抱えて歩いている後ろを、ニアは涙の跡が残る顔を隠そうともせずにフラフラとついに行っていた。

「ニア……殺れ」

「えっ?……やれっ?」

突然のメツの言葉に、ニアは訳がわからず思わず聞き返してしまった。

「そいつらの命の代金はすでに払ってある……俺らが天の聖杯を手に入れたって話、知る人間は少ない方が何かと都合がいいからな」

「でっ、出来ないよ!?!この人達関係ないじゃん!!」

なんの躊躇ちゆうちゆうもなくサルベージャーチームの人達を殺せと命じるメツに、ニアは目を見開き猛反発した。

「おかしな事を言う……お前、自分が何のためにここにいるのか忘れたのか?」

「け、けど?!?……アタシ……もう人が死ぬのなんてヤダよ!!」

「ハツ!!人が死ぬのがイヤだと?お前、まだあの坊主ボウズの事を気にしてんのかよ……まさか情でも移ったか?」

「……それは……」

「ああっ!!めんどくせえ!!……もういい、俺がやるわ」

気持ちの整理がつかないニアを見ていたメツはついに苛立ち、サルベージャーチームをニアに変わって殺そうと前に出た瞬間

ゴオツ!!!

「何っ!?!」

「うわあっ!?!」

ホームラの眠る棺ひつぎが突如大きく燃え上がり、とてつもない熱さに苦悶の表情を浮かべた

メツは思わず棺ひつぎをその場に投げ捨ててシンの元まで下がった。

しかし、メツの近くにいたニアは突然の炎に驚き尻もちをついてしまいその場から動けなくなっていた。

そして

棺ひつぎの中に眠るホムラを起点に、天を貫くような大きな火柱が爆発とともに立ち上ったのであった。

「うにゃああつ!!」

「お嬢様っ!!」

尻もちをつき動けなかったニアは爆風の影響をモロに受けてしまい沈没船の入口に向かって吹き飛ばされたが、ビヤッコが素早く先回りをして受け止めてくれたおかげで壁に激突という大惨事からは免まぬれることが出来た。

「お怪我はありませんか!?!お嬢様!!」

「うん、アタシは大丈夫……ありがとうビヤッコ」

ニアとビヤッコがそんなやり取りをしている中、火柱の中から火の塊がひとつ飛び出すとちょうどニア達の真上に位置する柱の上に着地したのであった。

やがて火の塊の炎が消えると、露出の多い赤と黒の衣装に身を包んだ一人の女性ホムラが姿を現した。

「アイツは……?」

「まったくひでえ事しやがるなあ」

「えっ?」

ホムラの姿をみて驚いていたニアだったが、沈没船の入口から聞こえてきた声に思わず振り返ってしまった。

「いきなり後ろから心臓をひと刺ししやがってよ、そう思うだろう……猫ちゃん」

「…レ……ツクス……?」

「…危あぶねえから下がってな」

死んだはずの男を見て呆然としているニアの頭を軽く撫でたレックスは、ニアを後ろに下がらせると赤い大剣を肩に担ぎながらゆっくりと前に進んできた。

「よお……さつきぶりだな」

「坊主……その剣……まさか……」

メツはレックスが肩に担いでいる赤い大剣を見ながら、信じられないような表情を浮かべていた。

「フツ……ホムラ!!」

「はい……」

「行くぜ!!」

「……はい!!」

レックスの掛け声にホムラが答えると同時に、レックスは走り出しホムラは大きく跳躍した。

「あー……あとこれ、返す!!」

「ええっ!？」

レックスはそう言つて、赤い大剣を空中にいるホムラに投げ渡し背中にある愛用の大剣「レッドクイーン」を引き抜いた。

ホムラも投げ渡された赤い大剣「聖杯の剣」を驚きながらもしつかり受け取つて着地するとレックスの後ろを追いかけた。

「……………」

「いい……俺がやる」

向かってくるレックスを見ていたシンが背中中の太刀を抜こうとしたが、メツはそれを止めさせると自身の持つトンファー型の武器を構えた。

「ハアアッ!!!」

「フウンツッ!!!」

レックスとメツは同時に武器を振るいぶつかりあった。

鏢^{つばぜ}迫り合いの状態になるとともに両者の武器同士がぶつかり合っている部分からバチ

バチと火花が散っていた。

「悪いな坊主^{ボウズ}、あいつの力をそうホイホイ使わせるわけにはいかないんでな」

そう言いながら、力を込めて武器を振るい鏢迫り合い状態からレックスを無理矢理後ろに下がらせた。

「俺が相手をしてやるぜ」

「ハッ!!面白れえ、仮面野朗の前座にはちようどいい相手だぜ」

「テメエツ……!!」

「C, m o n , w i m p !!」

挑発を受けて青筋を浮かべるメツを見て、レックスはさらに攻撃してこいと言わんばかりに無防備な姿を見せてさらに挑発を行ったのであった。

一方、戦闘を開始しようとしているレックスに助太刀するため走っていたホムラであつたが

「来いよ、天の聖杯!!」

「くうっ!？」

ザンテツからの猛攻によって妨害されており、なかなかレックスの元へ行けないでいた。

ガキインツ

キインツ

「ここまでやるとはな、坊主!!」

「なんだ? もうへばったのか?」

「バカ言ってるじゃねえ!! こんな楽しい殺し合いをやれてんのにへばってられるかよ!!」

互いの武器を数えきれない回数ぶつけ続けていたレックスとメツの戦いは、もはや常人では捉えきれないほどの領域に踏み込んでいた。

メツはトンファー型の刀剣を振るい、時にフェイントをかけたたり、拳や足などの体術を織り交ぜて絶え間ない猛攻を繰り出していった。

対してレックスは、左腕一本で身の丈ほどあるレッドクイーンを軽々と振るい大剣の重さをうまく利用した重々しい攻撃を繰り出しており、時折柄を捻り炎を吹き出させて剣速を上げていた。

そして

「(クソツ!? 一体どうなってやがるんだ坊主ボウズの右腕は!?)」

レックスの最大の特徴である包帯の巻かれた右腕が猛威を振るっていた。

かわしきれないメツの攻撃をレックスはまるで虫をはらいのけるかのようにして右腕で弾いていたのであった。

「チツ?! おいお前ら!! さっさと船に戻って離れろ!! 邪魔なんだよ!!」

レックスとメツの戦いを呆然と見ていたサルベージャーチームの者達にしびれを切らしたレックスがそう怒鳴ると、ようやく動き出したサルベージャーチーム達はウズシオへと走り出した。

「よそ見してんじゃねえぞ坊主!!」
ボウズ

「うおっ!!」

サルベージヤーチームに視線を向けていたレックスにメツが急接近すると、襟元を掴み一本背負の要領で後ろへ大きくレックスを投げ飛ばした。

投げ飛ばされたレックスは、受け身も取れずに甲板に背中から叩きつけられてしまった。

「ザンテツツ!!」

「おう!!喰らえ!!」

メツは相棒のザンテツの名前を呼びながら武器を上にはり投げると空中でザンテツが武器を掴み、腕と武器を交差させるように振るい斬撃をレックス目掛けて放った。

「クソツ!!」

受け身を取れなかったために迎撃するのは無理だと判断したレックスは、せめて防御だけでも考えて右腕を盾にするように構えたが

「レックス!!」

「お前っ…!!」

ザンテツが離れたおかげでレックスの元に迫り着けたホムラが斬撃に向かって手を

かざすとシールドが張られレックスを守ったのであった。

「へっ、もうちよつと早く来てほしかったぜ」

「ご、ごめんなさい……」

「気にしてねえよ、だけど助かったぜ……サンキュー」

「ふふっ……どういたしまして……続き、行きましょう」

「ああ!!」

互いにそう言うのと、二人は同時に走り出した。

「ハアツ!!」

ザンテツは向かってくるレックスとホムラにふたつの斬撃を繰り出した。

繰り出された斬撃を見たホムラがシールドで防ごうとするが、それよりも速くレックスが前に飛び出し

「同じ手は効かねえんだよ!!」

一撃目の斬撃をレッドクインで弾き、二撃目の斬撃は右腕で殴り消滅させた。

「何いッ!？」

「ウソ……ッ!？」

普通ならありえない瞬間を目の当たりにしたザンテツとホムラは驚愕した。

ブレイドから力を送られた状態のドライバーであれば斬撃を弾いたりすることは可

能だが、力を送られていない状態のドライバーが斬撃を弾くことは不可能なはずであった。

しかしレックスはレッドクイーンでいともたやすく斬撃を弾き、さらには右拳の殴打で斬撃を消滅させてしまったのである。

「ルアアッ!!」

レックスはそのままメツに向かっていきレッドクイーンの柄を捻り炎とともに剣速を上げた一撃を振るった。

「チッ!? ザンテツ!!」

「おう!! 受け取れメツ!!」

「坊主ボウズよりも先にアイツらを始末させてもらうぜ!!」

レックスの一撃をジャンプしてかわしたメツはザンテツから武器を投げ渡され、受け取るとトンファー型からブレード型に武器を変形させると剣先にエーテルを収束させてサルベージャーチームの乗るウズシオを沈めようとするが

「おい!! お前の相手は俺だろうがよ!!」

「くっ!? 坊主ボウズ!!」

レックスが腰から大型二連リボルバー“ブルーローズ”を引き抜きズドンツと重厚な音を響かせた。

メツもすぐに防御したが、あまりの重々しい衝撃に体勢を崩してしまった。

「今です!! レックス、私と一緒に!!」

「ああ!!」

そんなチャンスを見逃さなかったホムラはレックスに呼びかけ二人で大きくジャンプすると、ホムラが右手で聖杯の剣を持ち、レックスが左手で聖杯の剣を握ると今までよりもさらに炎のオーラの勢いが増していた。

「**二**×バーニングソード**二**!!!!」

そして、メツよりも高い位置に来ると二人は同時に剣を振り下ろし爆炎とともにメツに強力な一撃を叩き込んだ。

はずであつたが、間一髪のところではザンテツがメツの元に辿り着きエーテルエネルギーを送り込んでいたために、メツは二人の攻撃を防ぎきっていたのであつた。

「^{ボウズ}坊主、なんでお前ごときが………と言いたところだが、その瞳の色……もつと注意して

おくべきだったな」

そう言いながら、メツはレックスの“金色の瞳”を恨めしそうに見ていた。

「あ？なんのことだ!!」

「…教えねえよ!!」

「つ?!…レックス!!」

レックスの言葉にメツは左手に禍々しい紫のオーラを纏わせると、その左手をレックスに繰り出そうとしていた。

それを見ていたホムラはレックスを下がらせようとするが

「オラアツ!!」

なんとレックスは下がるところか禍々しいオーラを纏わせたメツの左手に、右拳を叩き込んだのであった。

そして、その反動により後ろに飛んだレックスとホムラはメツから離れた。

「レックス!!大丈夫ですか!?!」

「あ？なにがだよ」

「右腕……が……」

メツの纏った左手のオーラを殴った右腕を心配するホムラであったが、少し包帯が解れただけでほとんど無傷の右腕に言葉が詰まった。

「どうした?」

「な、なんでもないですよ!」

「?……そうか」

そう言いながら、レックスが横をチラリと見るとウズシオがゆつくりと古代船から離れていく姿があった。

「さてと…観客がいなくなつちまつてテンション上がらねえが、これで思いきり暴れるぜ」

「レックス…これを……」

「おう、わりいな」

ホームラから聖杯の剣を受け取ったレックスはそれを肩に担ぎメツのいる方へと歩き出した。

対してメツもレックスの方へと歩いてきていた。

「暴れられる…ねえ、まるでまだ実力を出しきつてなかったみたいなの言ひ草じゃねえか坊主」

「そうだと言つたら?」

「上等だ!!」

そして両者は互いの倒すべき敵に向かって走り出し

「メツっ!!!」

ボウス
「坊主っ!!!」

レックスの聖杯の剣とメツのトンファー型の武器がぶつかり合い、二人の足元の床がひしゃげ亀裂が入った。

「なんだよ……これ……」

「……すごい」

ザンテツとホムラはそれぞれのパートナーにエーテルエネルギーを送りながら、レックスとメツの戦いを見て言葉を失っていた。

「ルアアアアッ!!!」

「オラアアアッ!!!」

両者共に一歩も後退することなく、相手を倒す……いや殺すために剣を振るい続けていた。

「づう!?……んの野朗!!」

首を狙った攻撃に対しレックスは体ごと傾けて回避したが、剣先が掠ってしまい首筋を浅く切り裂かれた。

首元からの鋭い痛みでレックスは表情を歪めるが、体を傾けた状態から全身のバネを使い下から聖杯の剣を振りぬいた。

「がふっ!?!」

レックスの攻撃にメツも上体を反らし回避しようとしたが、攻撃直後だったこともあり回避しきれず腹から胸にかけて大きく切り裂かれてしまった。

「ぐうっ!?!……~~ス~~パイラルソバット~~ス~~!!」

「ぐふっ!?!……っ!!……オラアアツ!!!」

「ぎいっ!?!」

しかしメツも痛みを歯を食いしばり耐えると体を翻し、ひるかえレックスの顔面に強烈な回転後ろ蹴りを繰り出した。

蹴りを顔面に喰らったレックスは、蹴られてよろめいた勢いを利用して体を反転させて聖杯の剣の柄尻をメツのコメカミに叩き込んだ。

お互いの攻撃の勢いにより両者はそれぞれのブレイドの元まで吹き飛ばされてし

まった。

「おい!?大丈夫かメツ!!」

「ぐっ……なかなか……楽しませるじゃ……ねえか、あの坊主^{ボウズ}」

血が流れるコメカミを押さえ息を切らしながらもメツはレックスの実力を真つ向から受けられたからなのか笑っていた。

「ハア……ハア……」

「大丈夫ですかレックス!」

「心配いらねえ……ハア……こんなの……かすり傷だ」

首筋から血を流しながらレックスは、笑いながら強気に答えるが顔面への蹴りが効いているのか足元がフラついていた。

「レックスは休んでいてください、ここは私が……痛うっ!」

「っ!?……おいどうした!!」

ホムラが落ちていた聖杯の剣を持ち上げようとした瞬間、首筋を押さえて蹲^{うずくま}つてしまった。

突然のことにレックスがホムラに近付き首筋を押さえていた手を退かすと、そこには

痛々しい傷があった。

「お前……なんで俺と同じところに傷が…?!」

そう言いながら、ホムラの顔を見るとうつつすらだが鼻元に血を拭ったような跡もあった。

それを見てレックスも思わず鼻元を拭うと、手に血が付いていた。

「まさか……命を分けたから傷も共有しちまつてるのか？」

「……………はい」

「つうことは……俺が無茶しすぎるとお前もヤバいつてことか」

「……………(ぐ)めんなさい」

顔を俯かせながら謝るホムラを見ていたレックスは不意に右腕に目を向けた。

「……………仕方ねえ」

心の中でそう呟くと左手を右腕に添えると目を閉じて集中し、ゆっくりと着実に右腕から力を引き出すイメージを思い浮かべた。

その瞬間

「えっ!? これは……………!!」

体の変化にいち早く気が付いたのはホムラだった。

彼女が驚きながらも傷のあつた首筋に手を当てると

「傷が……消えてる?……いや治ってる!」

痛々しく刻み込まれていた傷が完全に塞がっていたのであった。

「レックス、これは一体?」

「ハアツ……ハアツ……」

「レックスッ!」

ホムラがこの現象について聞こうとレックスの方を向くと、そこには先程以上に呼吸が乱れたレックスの姿があった。

「一体どうしたんですかレックス!」

「なんでもねえ……ただ疲れただけだ」

「でもっ!!」

「とりあえずあとは頼んだ……俺は休ませてもらおうぜ」

そう言つてレックスは背中から甲板の上に仰向けに倒れ込んだ。

「……分かりました……レックスはゆっくり休んでいてください」

「……おう」

ホムラの言葉にレックスは倒れたまま軽く手を振つて答えた。

それを見たホムラはメツとザンテツに向かって走り出したのであった。

第四話 右腕

「はあっ!!」

メツとザンテツに向かつて走り出したホムラは、大きくジャンプすると落下の力を利用してメツ目掛けて聖杯の剣を振り下ろした。

しかし、メツはトンファーを上にご構えて軽々とホムラの攻撃を受け止めたのであった。

攻撃を止められたホムラは、鏑迫り合いの状態のまま倒立のような体勢になりながら剣を弾き距離を取った。

「オラアッ!!」

剣を弾かれたメツは体勢を整えるとホムラに接近しレックスの時のような連撃を繰り出す。ホムラはレックスのような荒々しい攻撃とは裏腹に女性特有のしなやかな動きと柔軟性を活かし、メツの攻撃を最小限の動きだけで受け流し回避していた。

「やあっ!!」

メツの攻撃を後ろに飛んで回避したホムラは聖杯の剣を振る炎の斬撃を放つがメ

ツはトンファーを振るい、いとも簡単に斬撃をかき消してしまった。

しかし、ホムラはかき消されて霧散した火の粉の中に紛れてメツに接近して斬りかかった。

メツも少し驚きはしたが冷静にホムラの攻撃を受け止め、再び両者は鏝迫り合いの状態になった。

「寝起きにしちゃあ、いい太刀筋してるじゃねえか……坊主程じゃねえがな」

「くうっ!!」

「しかし、俺にばかり構ってていいのか？坊主ボウズが危ねえぜ？」

「なっ!!」

メツの言葉にホムラが休んでいるレックスに目を向けると、メツのブレイドであるザンテツがレックスに襲いかかろうと走っていた。

「そこを退いてくださいっ!!」

「退くわけねえだろ!!」

ホムラが焦りメツを引き離そうとするが、メツは離れようとせず攻撃を叩き込み続けホムラを逃がそうとはしなかった。

「クソツ……やべえな」

先程の力を使った反動で立ち上がることすら出来ない状態のレックスは、こちらへ向かってくるザンテツを見て冷や汗をかいていた。

「これでくたばりなあ!!」

ザンテツは自身の鋭い爪を構え動けないレックスを引き裂こうとするが

「させるかあ!!」

「っ!?!」

ザンテツの背後から声と共に衝撃波のようなものが放たれ、ザンテツはシールドを張って防いだ。

その隙を掻い潜^{すき}って白^かい影^{くぐ}がレックスを守るように立ちふさがった。

「これ以上レックスを傷つけさせるもんか!!」

「……ニア……」

レックスの前に立ちふさがったのは、ビヤッコに跨^{また}がったニアであった。

「ニア!? テメエどういうつもりだ!!」

「それはこっちのセリフだよ!! レックスを巻き込んで、ここまで連れてきたサルベージャーの人たちまで殺そうとして……アンタ達こそどういうつもりなのさ!!」

「テムエがそれを気にする必要はねえんだよ雑用が!!」

ザンテツはニアとの話を切り上げ、邪魔をした彼女を攻撃しようと突っ込んできた。

「ビヤッコ!!」

「承知!!」

突っ込んでくるザンテツに対して、ニアもビヤッコに跨ったまま共に走り出した。

ニアが声をかけ、ビヤッコが咆哮を上げると衝撃波が放たれたがザンテツは持ち前のスピードを駆使して衝撃波を回避した。

「そんな攻撃なんざ当たらねえよお!!」

「くうっ!!」

衝撃波を回避したザンテツはニアを爪で引き裂こうとするが、ニアもタダでやられるはずもなく両手のツインリングで攻撃を防いだ。

「防いだか……だがな!!」

「うわっ!!」

「お嬢様っ!!」

攻撃を防がれたザンテツはそのままツイインリングを掴むと、ビヤツコに跨るニアを引
きずり下ろすと甲板に叩きつけたのであった。

「ぐう!?!」

「これで終わりだ!!」

「ヤバッ!?!」

叩きつけられた痛みで悶絶するニアにトドメを刺すために、ザンテツは空中で身をひるがえ翻し爪を突き出した。

しかし

ズドンツと重々しい音と共に空中にいたザンテツを何かが吹き飛ばした。

「がっ…あゝ あっ!?!」

受け身をとったザンテツであったが脇腹からの激痛に思わずうずくま蹲ってしまい、痛みの元である脇腹を見ると痛々しい銃痕が刻まれていた。

「な…なにが……」

「大丈夫か？」

「ふえっ」

突然吹き飛ばされたザンテツに呆然とするニアであったが横から声を掛けられて隣を見ると、ブルーローズを構えたレックスが立っていた。

「レックス!?!…アンタもう大丈夫なの？」

「まだ大丈夫とは言えねえが、女に守られっぱなしってのはカッコわりいだろ？」

そう言うと、レックスはブルーローズをホルスターにしまい背中 of 剣用ホルスターからレッドクイーンを引き抜くと、そのまま甲板に剣先を突き刺した。

「来なトカゲモドキ……あの時の続きを始めようぜ!!」

そんなセリフと共にレッドクイーンの柄を捻ると、エンジン音と共に炎が吹き出した。

「この野郎……いいぜ、テメエをズタズタに引き裂いてやるよ!!」

対してザンテツも脇腹の傷をブレイド特有の回復力により治すと、自身の鋭利な爪を構えた。

”Blas^{吹っ}st^飛!!”

先陣を切ったのはレックスであった。

レックスはザンテツに向かって飛び出しレッドクイーンの吹き出す炎によって剣速を上げた横薙ぎを繰り出した。

だがザンテツは、身軽な動きで上にジャンプして避けると空中で前転してレックスの頭に踵落としを叩き込もうとするが

「ルアアツ!!」

横薙ぎに振るったレッドクイーンの重さを利用して、左足を軸にその場で回転するとそのまま切り上げへと繋げ、踵落としを繰り出したザンテツの足を真つ二つに切り裂いた。

「いつでえ!?!」

足を真つ二つにされたザンテツは激痛に声を上げるが、空中で体勢を立て直し素早くレックスから離れるように距離を取った。

しかしザンテツが距離を取り着地して前を向いた瞬間、眼前にはレッドクイーンを振り上げたレックスの姿があった。

「オラア!!」

「ガハッ!?!」

レックスはレッドクイーンを振り下ろし、ザンテツの胸元から腹にかけて深々と叩き斬った。

コアクリスタル自体にはダメージがなかったためザンテツがコアクリスタルに戻ることはなかったが、叩き斬られた衝撃で吹き飛ばされてしまった。

「チイツ!!……この野郎!!」

「ぐうつ!?!」

吹き飛ばされたザンテツであったが素早く受け身をとりレックスに向かって飛び出すと、体を回転させて尻尾を横薙ぎに叩きつけた。

尻尾の攻撃をレックスはレッドクイーンの腹で受け止め防いだが、体調が万全ではなかったことが災いして攻撃の衝撃を受け止めきれずバランスを崩してしまった。

「しまっ!?!」

「もらったあ!!」

体勢を崩し膝を着いてしまったレックスにザンテツは好機と思い尻尾の攻撃から爪の攻撃に切り替え、レックスを引き裂こうとするが

「あつぶね!!」

「か…硬え」

レックスは爪の攻撃を右腕を盾にして防御しており、ザンテツは右腕のあまりの硬さ

に呻うめいていた。

「テメエツ!!その右腕……鋼鉄の籠こ手でも仕込んでやがるのかよ!!」

「へっ!!んなもん仕込むか……よ!!」

籠手の存在を疑ったザンテツにレックスがしかめっ面でそう返すと同時に右拳によるアッパーを顎に叩き込んだ。

「ぐぶっ!!」

アッパーを喰らったザンテツの体は半回転してレックスに背中を向けるように空中で逆さまになるような体勢になってしまっていた。

「まだまだ!!」

空中で逆さまになったザンテツの背中にレックスがしがみつき、抱えあげてジャンプすると

「オウラ!!」

そのままザンテツを頭から甲板に叩きつけたのであった。

それは所謂、ジャンピングパワーボムという技である。

あまりの威力にザンテツは悲鳴を上げることなく意識を失ってしまっていた。

「シヤア!!……ヤッハア!!」

「……………凄すぎでしょ」

「出来ればあんな技は受けたくはないですね」

大技が決まりまるでリングパフォーマンスのようにガッツポーズを行うレックスにニアとビヤッコは呆然としていた。

「へへっ!!……………っ!？」

気持ちのいい決め技に笑っていたレックスであったが、不意にかすかに聞こえた駆動音のような音に反応して振りかえると自分たちのいる古代船に並ぶように、巨大な船が姿を現していた。

「あれは……………アヴァリティア商会の港にいた…」

「モノケロス!!」

「なるほど、そいつがああ船の名前か」

レックスがそう言っていると、黒い船モノケロスから砲台のような物がせり上がり、とある場所に狙いを定めたのであった。

「っ!?!…やべえぞ!!」

砲台の狙う先を見たレックスはそう言うのと、全力で走り出した。

なぜなら砲台に狙われていたのは、メツと対峙しているホームラであったからだ。

時は数十分前、ザンテツがレックスに向かつていくのを止めるためにホムラがメツとぶつかりあっていた所まで遡^{さかのぼ}る。

「オラオラどうした？その程度じゃ、俺を倒すことなんか出来ねえぞ!!」
「くうっ!!」

初めは互角の勝負に持ち込めていたホムラであったが、体格の違いからか徐々に力負けしてしまい攻めあぐねていた。

「もつと来いよ!!」
「ヤアツ!!」

メツの振り下ろしたトンファーに対してホムラは逆手に構えた聖杯の剣で防ぎ、この戦いで何度目かの鏖^{あつ}迫り合い状態になった。

「へっ、こうしてお前と戦っていると思いい出すぜ500年前を………だが『その姿』どういうつもりだ?……やはり目指すか?楽園を?」

「それが『私達』の望みです!!」

「なら、させるわけにはいかねえなっ!!」

そう言つてメツは、ホムラの聖杯の剣を弾き左手に禍々まがまがしいオーラを纏わせてホムラに拳を振るうが、ホムラは大きく後ろに飛んでメツの攻撃をかわしたのであった。

そのまま着地したホムラは再び聖杯の剣を構えてメツとの戦闘に備えた。

しかし

「ホムラ!!後ろだ!!」

「っ!?!」

こちらに向かつて走ってくるレックスの言葉に反応したホムラが振り返ると、黒い船体をした船の砲台がこちらに狙っていたのであった。

とつさにシールドを展開すると同時に砲台から槍のような形をした砲弾が放たれた。

「ううっ!?!」

ブレイドが発生させるシールドは大抵の攻撃を防げるほど強固ではあるが、流石に長時間の維持は難しく雨のように降り注ぐ砲弾を受け続けるホムラは苦しそうに表情を歪めた。

「チツ!!あの砲台をなんとかしねえとツ!!……っあれは?」

砲弾の雨にさらされるホムラを助けるために走っていたレックスは、途中サルベージに使われる大型の機材が視界に入りホムラの方に向かいつつ機材のそばまで近付き右手で掴むと

「ウオラアアツ!!」

まるでボールを投げるかのように軽々と機材を投げ飛ばしモノケロスの砲台のひとつを破壊したのであった。

「なんだとっ!?!」

それを見ていたメツは信じられない物を見たように驚き、砲台を破壊したレックスに視線を向けた。

そしてレックスは砲撃の止まった隙をみて右手を振りかぶり、離れているにも関わらずホムラに向かって右拳を振るう動作を行った。

すると

「きやっ!?!」

突然ホムラの体が「何か」に掴まれるような感覚と共にレックスの方へと引き寄せられたのであった。

引き寄せられたホムラをレックスは素早く横抱きで受け止めて後ろへと下がった。

「大丈夫か？」

「は…はい、大丈夫です」

横抱きのままホムラに顔を向け安否を確認するレックスであったが、対してホムラはレックスの顔が近くに迫っていたために顔が赤くなっていた。

「そうか……っ!？」

ホムラが大丈夫だと分かり微笑んだレックスであったが、前方からの殺気に反応して反射的に右腕を構えると同時に衝撃が襲いかかった。

「やってくれるじゃねえか坊主!!」^{ホウス}

メツは砲台を壊されたためかレックスに怒りを向けてきていた。

メツは攻撃を防がれた状態からレックスを蹴り飛ばした。

「ちいっ!？」

左腕でホムラを抱き支えているため防御に徹するしかないレックスは舌打ちをしつつも的確に攻撃を防いでいた。

「レックス!!私のはいいですから……」

「黙ってる!! 舌噛むぞ!!」

「ひゃあつ!!」

自分のことは気にせず戦ってほしいとホムラが言おうとしたが、レックスは怒鳴るようにそう言う。ホムラを抱えたまま後ろへ大きくバク宙するようにジャンプしてメツの攻撃を回避した。

「はっ!! 女を守りながらじゃ戦えねえか?」

「うるせえよ!!」

メツからの猛攻をレックスは右腕で防いだり、刃のない部分を蹴って弾きながらのいでいた。

「そこお!!」

「うお!?!」

メツがトンファーでの攻撃と思わせて振るうと同時にブレードへと武器を変換させて攻撃範囲を変化させるというトリッキーな動きをしてきた。

レックスは持ち前の反射神経で反応することが出来たが、バランスを崩してしまいホムラと一緒に倒れてしまった。

「もらった!!」

倒れたレックスをホムラごと串刺しにするかのようにメツが空中からブレードを突

き立てながら落ちてきていた。

「ちっ!? 悪いホムラ」

「きやあっ!!」

倒れている状態のままレックスは自分の上に乗っかっているホムラを腕と腰の力を使つて横に軽く投げるように退かすと、すぐに右腕を盾にするように構えた。

次の瞬間、メツのブレードとレックスの右腕がぶつかり合いギヤリギヤリと金属同士が擦れるような音が響いた。

「このっ…いい加減鬱陶しいんだよ!!」

剣と右腕の鏢^{つばせ}迫り合いの状態から、レックスはメツの腹を蹴りつけて引き離れた。蹴り飛ばされたメツは空中で体勢を立て直し甲板に着地したのであった。

「レックス!!」

「ホムラ」

起き上がったレックスの隣にホムラが駆け寄り、武器を構えた。

レックスもそれに続くように背中からレドクイーンを抜き、甲板に突き立てると柄を捻りエンジンを吹かした。

しかし、戦いが長引いたせいなのかレックスは軽く息を切らし始めていた。

「ずいぶん粘るじゃねえか、坊主」

対するメツはレックスから受けた傷が残っているもの一切息を切らしておらず、それどころかいまだに余力を残しているようにも見える。

「くそっ」

「レックス!!大丈夫!?!」

「ニア……」

「ここからはアタシも加勢するよ!!」

「微力ながら私も加勢いたします!!」

そう言って、ニアはツインリングを両手に持ち、ビヤッコもニアの隣で体を低くしていつでも動けるように構えていた。

「ニア……お前、本当にそっち側に行くんだな」

「いままで世話になったけどね……もうアンタらのやり方にいい加減嫌気が差したんだよ」

「そうか……ならいい、お前はもう用済みだ!!」

メツは左手に紫色のエネルギーを纏わせると、そのままニアに向かって突っ込んできた。

「ニアッ!!」

メツが突っ込んでくるのを見たレックスがニアを守るように前に出て、迎え撃つため

にレッドクイーンを振り下ろした。

「ハッ!! 読めてんだよ坊主!!」ボウズ

「なっ!?!」

だがメツはそれを待っていたのかメツは紫色のエネルギーを纏わせた左手でレックスのレッドクイーンを受け止めたのであった。

「そらよ!!」

メツはレッドクイーンを掴んだまま大きく腕を振るい、レックスを剣ごと後ろへと投げ飛ばした。

「ちいっ!!」

レックスは舌打ちすると素早く空中で体勢を整えて甲板に着地したが、ホムラとニア達から引き離されてしまっていた。

「今度こそ死ね」

「っ!?!」

「させないっ!!」

レックスを引き離したメツは再び左手に紫色のエネルギーを纏わせニアを始末しようとしたが、それを黙って見ているホムラではなく助けようと剣を振るうが

「邪魔だ!!」

「キヤアっ!？」

メツの攻撃を受けて吹き飛ばされ甲板に体を打ちつけながら転がった。

「お嬢様には手出しさせません!!」

「お前もうるせえんだよ!!」

「ビヤツコ!!……うわっ!？」

ビヤツコもニアを守るためにシールドを張るがメツの攻撃により軽々と破られ、
を掴まれてそのまま投げ飛ばされてしまう。

「あぐっ!？」

ビヤツコが投げ飛ばされる際に、振り落とされたニアは甲板に落ちてしまった。

「あばよ……ニア!!」

「っ!?!…… (レックス!!)」

甲板に倒れたニアにトドメを刺すべくメツがエネルギーを纏わせた左手を振り下ろした。

メツに殺されると覚悟したニアは、目を瞑りレックスの名前を心の中で叫んだ。

「させねえよっ!!」

「坊主!! いい加減しつけえんだよ!!」

そんなニアの願いが届いたのかトドメを刺される前にレックスが現れメツの左手を右手で掴み止めたのであった。

そして、レックスは先程投げ飛ばされたお返しと言わんばかりにメツの左手を掴んだまま投げ飛ばそうとするが、メツは左手から発生させたエネルギーを放ちレックスの右手を弾いた。

「ちっ!?!」

右手を弾かれたレックスは即座に蹴りを繰り出す、メツのトンファー型に形を変え

た武器で受け止められてしまった。

しかしレックスは蹴りを止められるとすぐに体を翻し、もう片方の足で回し蹴りを繰り出した。

「ぐおっ!!」

そしてレックスの回し蹴りは見事にメツの腹を捉え、苦悶の声と共にメツを蹴り飛ばした。

メツはそのまま甲板に落下して転がりながらも素早く受け身を取り立ち上がった。

「オラアアッ!!」

すぐに立ち上がることを想定していたのかレックスは大きくジャンプして右腕を構えると、メツ目掛けて右拳を振り下ろしたのであった。

「くっ!!」

レックスの右拳に謎の悪寒を感じたメツは横に転がるように回避すると標的を失ったレックスの右拳は甲板に当たり、まるで紙細工に穴を開けるかのように軽々と鉄製の甲板を突き破ったのである。

「そこだっ!!」

「っ!!」

しかし、甲板を突き破り一瞬動きが止まったのを見逃さなかったメツは回避したあと

にレックスに接近すると右腕を掴んだのであった。

「悪いが坊主^{ボウズ}、お前の厄介な右腕消さしてもらうぜ!!」

そう言つてメツはレックスの右腕を掴んだまま紫色のエネルギーを纏わせ、そのまま放とうとした。

「やめろ!!メツ!!」

「レックス!!」

レックスの右腕が無くなるという最悪の結果を想像したニアとホムラが叫ぶが無慈悲にもメツはエネルギーを掴んだレックスの右腕に放った。

「なん……だと……っ!？」

はずだったか

「悪いが……俺の右腕は嫌になるくらい頑丈でな」

メツのエネルギーを受けてもなおレックスの右腕は健在していた。

しかし右腕を包んでいた包帯が解け、隠されていた右腕が姿を現していた。

「なに……あの右腕……っ!」

右腕を見たニアが思わずそう呟いている隣で、ホムラも声を出してはいないが驚愕の表情を浮かべていた。

「おいおい……なんだ坊主ボウズその腕は……」

「……答えてやる義理はねえよ」

そう言うと、レックスは右腕を振るいメツを弾き飛ばして距離を取るとおもむろに右手で甲板を殴り浮かせ、そのまま掴み上げて甲板の一部を剥ぎ取った。

「オラアツ!!」

そして剥ぎ取った甲板の一部をメツに向かってブーメランのように投げ飛ばしたのであった。

「へっ!!こんなもん……っ!」

向かってくる投げ飛ばされた甲板の一部を見たメツは余裕そうな表情のまま武器を構えたが、そんなメツの前に今まで傍観していたシンが割り込み背中の太刀を抜刀と共に縦に振り下ろし向かってきていた甲板の一部を切断した。

「シンツ!!」

「……は引くぞ、厄介な連中が出てきた」

太刀を背中に納刀しながらシンがそう言うのと同時に、古代船の甲板を埋め尽くすよ

うに無数の小さな空間の歪みが発生し始めた。

「なにつ!? なんなのこれっ!?」

「お嬢様!! 何かが来ますご用心を!!」

「これは一体!?」

突然の空間の歪みにニアとビヤッコ、ホムラが驚いている中、レックスだけはお構いなしにメツとシンに向かって走り出していった。

”Die!!”

エンジン音を響かせながら、突進力と炎の推進力を利用して横薙ぎにレッドクイーンを振るつたレックスであったがメツとシンは大きく跳躍して回避するとモノケロスの甲板に着地していた。

「悪いな坊主、今回はここまでだ……次に会う時にでも決着をつけようぜ」

「チツ!! 待ちやがれこの野郎!!」

捨て台詞を吐いてメツ、シン、そしていつの間にか目を覚ましたザンテツがモノケロスと共に離れていくのを見たレックスは、舌打ちしながらブルーローズで狙い撃ちにしようと構えたが

「っ!?」

歪んだ空間から巨大な鎌のような刃物が飛び出してきたためレックスはメツを狙い

撃つのを諦め後ろにジャンプして鎌を回避した。

「うわあっ!?!」

ニアの悲鳴が聞こえレックスが視線を向けると、ニア達にも空間の歪みから出現する巨大な鎌に襲われていた。

「クソッ!!」

それを見たレックスはニアとホムラのもとへ駆け出そうとしたが、行く手を阻むように空間からツギハギだらけの袋のようなものが現れたのである。

しかし、よく見ればただのズタ袋ではなくハリボテの手足のようなものがついており、さらには個体によって手か足の一部に巨大な刃を付けていたのであった。

そして、ズタ袋の中でボゴボゴと無数の「ナニか」が蠢きまるとひとつの生命体のように動いていたのであった。

「デメエら……っ!!」

現れた異形のモンスター……否、悪魔“スケアクロウ”の姿を見たレックスの脳裏には、最愛の人を失ったあの日の光景が

びと共にレッドクイーンを横薙ぎに振り抜いていた。

渾身の横薙ぎにスケアクロウ達は無惨にも上半身と下半身とに両断されてしまい、体液のようなものを撒き散らしながら消滅していったのであった。

「レックス!!……くう?!!」

まるで人格が変わってしまったかのようにスケアクロウを殺しだしたレックスを心配するホムラがそばに行こうとするが、スケアクロウ達の猛攻のせいで近付けれなかった。

「こんのく、しつこい!!ビヤッコ!!」

「はい!!お嬢様!!~~ワイルド~~ア~~ア~~!!!!」

呼びかけるニアに応えるようにビヤッコが前に出ると、大きな咆哮と共に衝撃波が放たれ群がるスケアクロウ達をまとめて吹き飛ばした。

「ホムラ!!今のうちにレックスの所に!!」

「ありがとうございます、ニア!!」

ニアのおかげで道が開かれ、ホムラは礼を言いながらレックスを助けるために走り出したのであった。

「デメエらがア”ア!!!」

レックスが叫びながらレッドクイーンを振り下ろすとスケアクロウを縦に真つ二つに切断し、さらには甲板さえも切り裂き刃が深々と食い込んでいた。

「オ”ア”ア”アアッ!!!」

甲板に食い込んだレッドクイーンをもともせず力任せに引き抜き踏み込むと、スケアクロウの集団に向かって飛び出しレッドクイーンを叩きつけた。

「まだだ……まだア”ア!!!」

「レックス!!」

まるで何かに取り憑かれたかのようにうわ言のように眩きながら次の獲物に向かうとしたレックスの背中にもムラが抱きつき引き止めた。

だがレックスはホムラを振りほどこう暴れるのであった。

「離せえ!!俺は……俺はアイツらを!!!」

「もうやめて!!これ以上あなたが……レックスの苦しむ姿を見たくない!!!」

「っ!?!」

私があなただを守るわ!! レックスの苦しむ姿はもう見たくないから

ホムラのその言葉を聞いた瞬間、レックスは過去に大切な人が約束してくれた言葉を思い出していた。

「レックス!!」

「……あ……ホム……ラ……?」

ホムラの呼び掛けによって意識が戻ったレックスであったが、そんなスキを見逃すスケアクロウ達ではなく数十体のスケアクロウが一斉に飛びかかりホムラとレックスを切り裂こうと刃を構えた。

その時

突然、空から巨大な火の玉が降ってきてレックス達に襲いかかろうとしていたスケアクロウ達を燃やし尽くしたのであった。

「これは…!!」

「レックスー!!!」

突然降ってきた火の玉にレックスは驚くが、空から聞き慣れた声が聞こえ上を見ると、これまた見慣れた巨神獣^{アルス}の姿があった。

「ジイさん!!」

「レックス!!早くワシの背にのるんじや!!」

そして、セイリユウは古代船の横に並ぶように降りてきたのであった。

「ああ!!…ホムラ!!ニア!!……来い!!」

「はい!!」

「うえっ!?!」

「お嬢様、私の背中に」

ふたりにそう言つてレックスはセイリユウに向かって走り出し、ホムラもすぐに答えてレックスと共に走り出した。

ニアは突然のことに一瞬遅れてしまいがビヤッコに背中に乗るように言われ、そのままビヤッコと共にセイリユウに向かつて走り出した。

当然、それを黙って見ているスケアクロウ達ではなくすぐに追いかけるが跳ねるように移動するゆえにほとんど追いかけていなかった。

「あいつら早く動けないみたいだよ」

「なら好都合だ!! さっさと乗り込め!!」

レックスがそう叫んだ瞬間、突如背後からギヤリツギヤリツと金属同士が擦れ合うような音が聞こえてきたのである。

不思議に思い振り返ろうとするレックスだったが謎の悪寒を感じ取った彼は叫んだ。

「ふせろ!!!」

「キヤアッ!」

「うおわっ!」

突然の叫び声に驚きつつもホムラとニア、ビヤッコが伏せるとレックス達の頭上を回転する黒い物体が通り過ぎていった。

しかし

「ウゴアアツ!!」

「ジイさん!!」

標的を見失った黒い物体はそのままレックス達を待っていたセイリユウにぶつかり血しぶきが舞っていた。

黒い物体はそのまま跳ね上がるとセイリユウの背中の上に着地してその姿を現した。

よく見れば黒い物体は無数の刃を全身に身に着けており手足の部分もすべて大小の刃物で構成されていた。

そして体は先程のスケアクロウ達と同じようなズタ袋のような体をしているが黒色かつそのサイズは一回り大きかった。

「この野郎!!」

共に生活してきたセイリユウを傷つけられ頭に血が登ったレックスはブルーローズを抜き黒い物体に向かって引き金を引いて撃つが、黒い物体“メガスケアクロウ”はその巨体に似合わぬ動きで上に跳んで銃弾をかわし、背中の大きな刃を下にして落ちてきたのであった。

「なっ!?!」

想像以上の動きにレックスは驚くがすぐに後ろに跳んでメガスケアクロウの落下攻撃を回避したが、メガスケアクロウはすぐに起き上がり手の部分に付いている刃を手裏

劍のように飛ばしてきた。

これにはレックスも度肝を抜かれたが考えるよりも先に体が反応して動き、レツドクイーンを逆手で下から斬り上げて飛んでくる刃を弾いたのだった。

「アアッ!?ウザつてえ!!」

メツとの戦いから悪魔共との戦いと戦闘続きでストレスが溜まっていたレックスはそう言うと、ホムラを助けた時のように右腕を振りかぶり届いていないにも関わらず殴るような動作を行った。

そこまではあの時と同じであったが今回は少し違った、何も無い空間を殴りつけた瞬間にレックスの右腕から青い光が漏れ出し、そこからかろうじて手の形をした靄もやのようなものが伸びてメガスケアクロウを掴むとレックスの方へと引き寄せ

「飛んでいきやがれ!!」

メガスケアクロウを右腕で掴むとハンマー投げのようにグルグルと回って遠心力をつけ、こちらへ向かってくるスケアクロウ達に向かってメガスケアクロウをぶん投げたのであった。

投げられたメガスケアクロウはスケアクロウ達にぶつかり、運のいい者は弾き飛ばされ、運の悪い者はメガスケアクロウの刃で真つ二つにされていた。

「ハッ!!Jack pot!!」

「レックス!!」

スケアクロウの群れのド真ん中にクリーンヒットしたのを見てガッツポーズをするレックスを呼ぶ声が聞こえ、そちらを見るとホームラとニア、ビヤッコがすでにセイリユウの背中に乗っていた。

「今行く!!ジイさん、飛べそうか!？」

「この程度かすり傷じゃ、それよりもレックス急いで乗るんじゃ!!」

「ああ!!」

そう言って、レックスは甲板から大きくジャンプしてセイリユウの背中に乗り込んだ。
だ。

「急いでここから離れろ!!」

「分かつとる!!しっかり掴まっとれ!!」

セイリユウは大きく翼を羽ばたかせ飛び立った。

飛び去っていくセイリリュウをシンとメツが静かに見つめていた。

「戻るぞ」

「ああ？追わないのか？」

「目覚めたのなら、それで十分だ……あとはヨシツネじゅうばんに探らせる」

「ふん……そういうことか」

第一章 出逢い

第二章 機械仕掛けの人形（ブレイド）

第五話 篝火

「☒…というわけで命からがら逃げてきたのですも☒」

「というわけでじゃないも!!お前はアホかも!!」

レックス達が古代船からセイリユウと共に離れてから数時間経った頃、アヴァリティア商會會長バーンの部屋にて通信機越しにプニンが連絡をとっていた。

「どうしてきつちり死んでこないも!!あとで返金しろって言われたらどうするつもりも!!」

「☒えっ?…死んで…返金ってどういう…?☒」

「ふん、こつちの話だも」

バーンの口から聞こえた不穏な言葉にプニンが追求しようかとしていたが、その前にバーンがこの話題についてはぐらかすように話を終わらせた。

「で？……レックスとそのブレイドはどこ行つたんだも？」

「☒はい……レックス達を乗せた巨神獣^{アルス}は、トルネア海から南に逃げてその後は行方知れずですも……なにぶん嵐が激しかったもので……☒」

「わからない……も？」

「☒はいも……☒」

「で……逃げてきたも？」

「☒は……はいも☒」

「んぐもも……」

プニンがバーンからの質問に焦りながらも答えると、バーンはそのまま唸り声を上げてしまう。

「言い訳は聞きたくないも!!とつと戻ってこいも!!次の仕事が山盛りになつても!!」

そして、バーンは机を叩きプニンに怒鳴り散らした。

バーンの気迫にプニンは飛び跳ねるように驚いてしまい通信はそのまま切断されてしまった。

「ももも……ウズシオにも保険をかけてたつてのにこれじゃあ大損だも……それにしても」

バーンはチラリと壁にかけられたアルストの地図を見て思案し始めた。

「トルネア海から南ということは……今の時期だとグーラに向かった可能性があるも……グーラのモーフ領事を呼び出せも!!」

「わかりました、少々お待ちください」

バーンが傍らかたわに控えていた美女に命令して通信機を操作させるが、待っている間にバーンはグーラでの「ある噂話」を思い出していた。

「(そういえばグーラの森には、空を飛ぶ巨大な蛇ヘビが出るという噂を聞いたことがあるもが……まあどうでもいいも)」

「うっ!? ……あ……(ハハ)はっ。」

背中からの鈍い痛みを感じたレックスが意識を取り戻して最初に視界に入ったのは木々の生い茂る森であった。

何故森の中で倒れていたのか思い出そうとしたが、その前に後頭部に感じる暖かくて

ほどよい弾力のある感触を不思議に思ったレックスが不意に上を見上げると、そこには山があった。

「……………山……………」

「レックス？」

思わず声を出してしまったその時、山の向こうから見知った顔が現れた。

山だと思っていたものは、膝枕をされてホムラの豊満な胸を下から見ているのであった。

「……………ホムラ？」

「良かった、どこか具合悪くありませんか？」

「具合というより……………背中が痛^いえ」

うめき声をあげながらレックスは上体を起こすと改めて周りを見てみた。

「それにしても……マジでどこ何処だ？」

「わかりません……何処かの巨神獣アールスに流れ着いたようでして」

「巨神獣……!!？」

ホムラの言葉を聞いて、なぜ巨神獣アールスに流れ着いたのか思い出そうとした瞬間に、レックスはセイリユウと自分達に襲いかかってきた怪物モンスターの姿が脳裏に蘇った。

時は少し遡りさかのぼ、命からがら古代船からセイリユウに乗って脱出したレックス達は休息を取っていた。

「大丈夫か、お前ら」

「私は大丈夫です」

「すつごい疲れた〜」

「お嬢様と私も問題ありません」

レックスがみんなの安否を確認すると、ホムラは軽く自身の体を確認してから答え、ニアはビヤツコにもたれかかりながらクタクタな様子を見せ、ビヤツコが変わりに答え
た。

「そうか……じいさん、傷は大丈夫か？」

「さつきも言ったが大丈夫じゃ、しばらく安静にしとれば塞がるじやろ」

「ならばしばらくはどこかの巨^{アル}神^ス獣に滞在するか、たしか進んでる方角だと今はグーラが

通る季節だったよな」

「そうじゃったか？」

「なんだジイさん、もうボケたか？」

「ボケとらんわ!? 逃げるのに必死じゃったから方角なんて気にかけてられんかっただけじゃ!!」

「はいはい……つと、見えてきたな」

セイリユウとそんな会話をしている間に、レックスはかすかに見え始めた^ア巨神獣^{ルス}の姿を確認していた。

「ジイさん、あと少し……っ!?」

セイリユウにもう少しの辛抱だと言おうとした瞬間、妙な気配を感じ取った。

「下から何か来るぞ!!」

全員に聞こえるようにレックスが叫ぶと、セイリユウの下から不穏な影が襲い掛かってきたのであった。

「ぐああ!？」

「ジイさん!!」

襲撃者はセイリユウの首に噛みつき食い千切ろうと体を左右に動かし始めた。

当然、その揺れはセイリユウの背に乗るレックス達にも襲っていた。

「うわわっ!?! いったいなんなの!?!」

「お嬢様!! 振り落とされないうように私に掴まってください!!」

「きやあつ!?!」

ニアはビヤッコにしがみつき、ビヤッコも主人が落ちないように姿勢を低くさせて揺れに耐えていた。

ホムラも突然の揺れに驚きビヤッコにしがみついていた。

「クソツ?!揺れるせいで狙いが……!!」

レックスは襲ってきた謎の敵にブルーローズを向け、狙いを定めようとするが激しい揺れのせいで狙えないでいた。

「ぐぶつ?!……ただでやられるワシではないぞ!!」

「おいジイさん、無理すんじや……っ!」

そんな中、噛みつかれていたセイリユウはレックスの静止の声も聞かず首に噛みつく敵の口に手をかけ、強引にこじ開け引き離そうとするが敵は鋭い牙をさらに食い込ませてきたのであった。

レックスがセイリユウに静止の声をかけようとした時、不意に前を見れば先程までかすかにしか見えていなかった巨神獣アルスがすぐ目の前にまで接近していたのであった。

「ジイさん!!前っ!!前に巨神獣アルスがっ!!」

「ぐううっ!」

レックスの声に反応してセイリユウは敵に首に噛みつかれたまま体を大きく反らし急上昇して巨神獣アルスとの衝突を回避した。

「うおお!!おっ落ちいつ!!」

「耐えてください!!お嬢様あつ!!」

「ひやああつ!!」

当然、背中にいるニア達は振り落とされそうになっていたが偶然にもセイリユウの体毛部分を掴んでいたため落ちはしなかったが、危機的状况に変わりはなかった。

そして

「ぐおおっ!!」

セイリユウの首に噛み付いていた襲撃者は、急上昇した時の力を利用してセイリユウを森に向かって投げ飛ばしたのであった。

「きやあつ!？」

「ホムラっ!!」

それが決め手となったのかついにホムラはセイリユウの背中から振り落とされてしまったが、それを見ていたレックスが飛び出し空中で抱きとめた。

「レックス!!ホムラ!!」

セイリユウの背中にしがみついていたニアが二人の名前を叫ぶが、ビヤッコとともにそのまま森の中へと消えていってしまった。

「ニア!!…クソツ!!」

レックスもニアの名前を叫ぶが徐々に近づいてくる地面に悪態をつく

「ガフツ!？」

ホムラを抱きしめたまま自身の体を身代わりにして地面に激突した。

「レックス!?!…レックス!!」

徐々に遠のくホムラの声を聞きながらレックスはそのまま意識を失ってしまった。

そして、時は再び現在に戻り

レックスはここにいる経緯を思い出したのであった。

「そうだ……俺達はたしか突然襲われて……っ!!…ジイさんとニア達は!」

そして、セイリユウとニアとビヤッコのことを聞くがホムラは深刻そうな表情のまま首を横に振ったのであった。

「クソツ!」

そんなホムラの表情を見たレックスは顔を顰めると近くに落ちていたレッドクイーンを拾い背中ホルダーに収めると走り出し、それにホムラも慌ててついていき二人は森の中へと入っていった。

「ジイさん!!どこだ!!」

森の中の沼地のような場所をレックスはセイリユウの事を呼びながら走っていた。

「レックス!!待って!!」

「ジイさん!!!ニア!!!ビャッコ!!!」

ホムラが声をかけるがレックスは何度もセイリユウ達の名前を呼び続けていたが、その様子にホムラは不安感を感じていた。

セイリユウ達の名前を呼ぶレックスの表情は恐怖に怯える子供のような形相をして

いた。

まるでセイリユウ達が消えることを恐れるように……

森の中を駆け巡っていると所々に折れた木の破片が目につくようになってきていた。それを見たレックスはなにかに気付いたのか折れた木々の後を追うように移動し始めた。

しばらく進み続けると、そこには首から多量の血を流し倒れ伏すセイリユウの姿があった。

「ジイさんっ!!」

その姿を目にしたレックスは声を荒げセイリユウの元へ駆け寄っていった。

「…レ…………レックス…か…………」

「…ひどく」

いまだに首から血が流れ出る傷痕を見たホムラは口元を手で覆い呟いた。

「おいジイさん!!しっかりしろ!!」

「心配…するな…………この程度…ぐうっ!？」

そう言つてセイリユウは、体を起こそうとするが力を入れた瞬間、体中を激痛が襲いそのまま地面に再び倒れてしまった。

「おいおい動くなジイさん!!待ってろ、なんとか傷口を止血するから…………」

「…………無理じゃ…傷が深すぎる…………それにだんだんと力が抜けていくのが…………分かる」

「諦めんじゃねえよジイさん、…………待ってろ、薬草かなんか見つけて…………」

「……無理じゃ……」

「……………っ!？」

なにがなんでも助けようとするレックスであったがセイリユウの一言を聞き、本当にもう手の打ちようがないことを突きつけられ膝から崩れ落ちた。

「これもまた…運命^{さだめ}じゃ……レックス…」

「ジイさんまで居なくなるのかよ………また…俺を一人にすんのかよ」

「すまぬ……レックス…」

俯いたまま呟くレックスを見たセイリユウはかすれた小さな声で謝罪した。

その瞬間、セイリユウの体が発光し、エーテル粒子となって消え始めたのであった。

「…別れは一瞬……やがてエーテルの導く先で、また巡り合う」

「……………」

セイリユウの言葉を聞いたレックスは、俯いたまま膝から崩れ落ちた。

「お前と過ごした日々、楽しかったぞ……また会おう……レックス」

その言葉を最後にセイリユウはエーテル粒子になり、空に消えていった。

「……………」

「…………レックス」

膝をつき俯いたまま動かないレックスを心配してホームラが声をかけるが、レックスは無言のままおもむろに立ち上がった。

「…………つくづく自分が嫌になるぜ」

「えっ？」

「目の前でまた大切な家族が死んだってのに……涙のひとつも出やしねえ」

そう言って、振り返ったレックスの顔は悲しみの表情を浮かべてはいたが涙は流れて

いなかった。

「もう人の死に様なんざ見飽きるほど見てきたからよ、心が壊れちまつたんだな…きつと…：…右腕がこんな風になつちまつたあの日から」

「そんなことありません!!!」

フラフラと歩きながら呟くレックスを見かねたホムラが大声で叫んだ。

「レックスはあの時、私を助けてくれました!!私のわがままみたいなお願いを聞いてくれました!!…だから…：…だから!!」

「…ホムラ…：…?」

必死に言葉を紡ごうとするホムラを見つめるレックスであったが、静寂の中にかすかに混じって響いて聞こえてくる音に顔を上げた。

「なんだ?」

「これは……大気中のエーテルが震えています、ドライバーとブレイドが何かと戦っているようです」

「そうみたいだな…それにどうやら相手はあのクソ共みたいだな」

レックスが右腕に視線を向けると、そこには何かに反応して脈動するように青白い光を発する異形の右腕があった。

「それは…」

「奴らが現れるとこうなっちまうのさ」

そう言うと、レックスは音の聞こえる方へ歩き出しホムラも共についていくのであった。

音の聞こえる方へ向かって歩いていく途中、橋の上を折れた大樹が道を塞いでしまつておりレックスとホムラは立ち止まっていた。

「チツ、道が…」

「ここは任せてくださいレックス、私の炎で……」

「待て待て!!火なんてつけたら最悪橋まで燃やしちゃうだろうが!!」

「あつ!?ご、ごめんなさい」

「ちよつと退いてろ、こいつは俺がやるからよ」

レックスは背中の中のレッドクイーンの柄を握りながら捻り、エンジンを吹かした。

「ルアアツ!!」

逆手に持ち替えたレッドクイーンを下から上へと噴き出す炎とともに振り抜き大樹に深々と傷を残し

「もう一丁!!」

続けざまに右腕のアップercuttを叩き込み大樹を真つ二つに殴り折ったのであった。

「よしっ!!これでいいだろ」

「すごい……ですね」

レッドクイーンを背中ホルダーに収めて先に進むレックスであったが、ホムラは軽々と大樹を叩き折ったレックスの実力に驚いていた。

「あのクソ共の相手してたから自然と力がついただけさ、それよりさつきよりも音が近付いてきたようだな」

「急ぎましよう!!」

「ああ!!」

先程よりも鮮明に聞こえてくる戦闘音を聞いたレックスとホムラは共に走り出すのであった。

場面は変わり、レックスとホムラの目的地である場所では

「こんの〜!!とりやつ!!…つてうわあ!?!」

「お嬢様っ!!」

セイリユウの背中から落とされたニアがビヤッコと共に素早く動き回る複数の敵を相手に奮闘していた。

ニア達が戦っている敵は爬虫類はちゆうるいのような鱗うろこに覆われた体に、甲冑かちゆうの兜かぶとを被り、盾を装備していた。

その敵は、かつて魔界の帝王が世界を侵略しようとした際に引き連れていたと言われている悪魔が野生化して環境に適応した姿の悪魔『アサルト』であった。

「こいつら!!すばしっこい上に鱗が硬い上に、盾の守りも固い!!」

「お嬢様!!危ない!!」

「今度は何!?!ってニヤハアア!?!」

ビヤッコの警告を聞いたニアがアサルトを見据えたのと同時に複数のアサルトの指先から射出された爪が眼前に迫ってくるのを見て、ニアは無意識のうちに足を地につけたまま体を後ろに倒して回避した。

「あいたっ!?!」

某マトリックス的な避け方をしたニアは、そのまま頭から地面に倒れてしまい動きが止まってしまった。

そこをすかさず狙ったアサルトは、飛び上がるとニア目掛けて爪を構えたまま螺旋回らせん転しながら突進してきたのであった。

「うわあっ!?!」

とつさに横に転がり回避したニアであったが、アサルトは螺旋回転したまま地面に激突するとそのまま地面の中へと潜ってしまった。

「あれ!?! アイツらどこに……!」

「お嬢様!! 敵は地面の中に潜りました!! 警戒を!!」

「下っ!?!」

そう言つてニアが足下に視線を向けた瞬間、地中からアサルトが飛び出し螺旋回転したままニアに突進を仕掛けていた。

そのままニアが貫かれようとしたその時

「うあっ!?!」

偶然にも足を滑らせたおかげでニアが後ろ倒れたために無事に回避した。

しかし、避けられて終わるアサルトではなく空中で静止したかと思いきや、再びニアに向けて螺旋回転を加えた突進を仕掛けてきた。

が

「ピギイイツ!?!」

「ヒエツ?!」

ニアの顔面スレスレを刃が通り過ぎアサルトを串刺しにすると、そのまま木に刺さりようやく止まり、アサルトから刃を伝ってドロリと血が滴っていた。

「ちよつとレックス!?!」

「おっと!? 咄嗟とっさだったから危うくニア当たる所だったぜ」

顔面スレスレを刃が通りすぎた恐怖から震える体を動かして後ろを見れば、右腕で何かを投げたあのようなフォームをしたレックスとあたふたとしてゐるホムラの姿があった。

「レ、レックス……ホムラ……」

「よおニア、顔大丈夫だったか？ 真つ二つに割れてねえか？」

「レックス様!! ホムラ様!!」

「ビヤッコも無事そうだな」

そう言いながらレックスは、息絶えたアサルトに足をかけて串刺しにしていた聖杯の剣を引き抜き大きく振るって滴る血を落とした。

「お前らはちよつと休んでな……ここからは俺とホムラでやるからよ」

「ニアはゆっくり休んでください」

そして、二人は前に出てホムラがレックスに力を送ると聖杯の剣のパーツが可動して炎のようなエネルギーの刃を展開させ、レックスは仲間がやられて後退るアサルト達を指差して

「C[＊], mon, Are you scared?」

ニヒルな笑みを浮かべながら挑発したのであった。

「グギヤアア!!」

「ピギユアア!!」

それが悪魔の逆鱗に触れたのか2体のアサルトは大きく鳴くとレックスに向かってきたのであった。

その途中、1体のアサルトが走りながら爪を射出させ、もう1体が大きく回り込み横から鋭い爪でレックスを引き裂こうと接近してきていた。

「へえ、トカゲの割になかなか頭を使うじゃねえか」

そう言いながら、レックスは飛んでくる爪を首を傾けたり半身に構えてすべて紙一重で回避して

「ノロいんだよ!!」

聖杯の剣を構え直し横から向かってきたアサルトに対して上段からの振り下ろしを繰り出し、アサルトを鎧ごと真つ二つに両断したのであった。

真つ二つにされたアサルトの断面は炎のエネルギーによって焦げついており、血が流れることもなくポトリと両断された体が力無く地面に落ちていった。

「あと一匹!!」

振り下ろした体勢から素早く構え直し、残り1体のアサルトに向くが

「あれ?」

そこにアサルトは居なかった。

どうやら仲間が真つ二つにされたのを見て逃げたようだ。

「チツ!?逃げやがった……頭が回るヤツほどつまんねえな」

そう呟くとレックスは聖杯の剣のエネルギーを消して地面に突き立て、ニアの元へと向かっていき左手を差し出した。

「大丈夫だったかニア」

「レックス……ホムラ……アンタ達なんで……」

「あの時船の甲板で助けてもらったんだ、こっちも助けて借りを返さねえと目覚めが悪
いだろ」

「ハハツ、レックスってそういう所は結構律儀なんだな」

「うるせえよ」

レックスはそう言いながら、ニアの手を掴み立ち上がらせた。

「まあ……なんだ……無事で良かったぜ」

「結構ギリギリだったけどね……って、そういえばあの時助けてくれたでっかい奴、あの
アルス
鬼神獣は……？」

そうニアが聞くと、レックスとホムラは暗い表情を浮かべると俯いた。

「……まさか……」

「……手遅れだった……あの蛇みてえなヤツから受けた傷が原因で……」

「レックス……」

「だがいつかジイさんの仇は必ず取る……あのクソ蛇を見つけ出して……ぶっ殺してやる!!……でも今はまずどこか落ち着ける所に移動しようぜ」

ギリギリと音が鳴るほど右手を握り締めて怒りに震えるレックスであったが、ここま
で戦闘続きで疲れてるであろうホムラとニアとビヤッコのことを考えたレックスは休
息を取るように促したのであった。

しばらくして先程の地点から少し移動した所にあつた程よい広さのある場所を見つけ、適当な枝を集めて焚き火を起こして全員で囲むように座つていた。

そして、レックスはホムラとの出会いやホムラの願いなどについてニアとビヤツコに軽く説明をしていた。

「……なるほど、その子と楽園にね」

ニアはそう言つてホムラに視線を向けると、ホムラも微笑みながらニアと視線を合わせていた。

「そういえばまだ礼を言っただけでなかったね、助けてくれてありがとう」

「気にすんな、何度も言うが俺も助けてもらったんだ当然だろ？……それにジイさんもそうしたはずさ……」

「……………」

家族のような存在であつたセイリユウを失つた悲しみを隠すように笑いながら語る
レックスを、悲痛な表情で見つめるホムラ

「さてと……明日は朝からまた歩くんだからよ、そろそろ寝ようぜ」

「そうだね……アタシもうクタクタだ〜!!」

ニアは寝そべるビヤツコのお腹を枕にするように寝転ぶと、すぐに眠気が来たのか穏やかな寝息が聞こえてきた。

「では私もおやすみなさいませレックス様、ホムラ様」

「おう」

「はい、おやすみなさい」

そして、ビヤッコもニアの枕にされた状態のまま眠ったのであった。

「ホムラも寝たらどうだ？ずっと戦闘続きだったからよ」

「私はもう少しだけ起きてます……それに私よりもレックスの方こそ眠ったほうが……」
「そうだな……俺も少し休むか」

そう言いながら、レックスはレッドクイーンを近くに生えている木に立て掛け、ブルーローズを抜いて即座に構えられるように手に持ったまま木にもたれるように座り燃える焚き火をしばらく見つめ続けてから目を閉じたのであった。

「……ん……」

何かが動く気配と音を感じ取ったレックスは半ば沈んでいた意識を覚醒させた。

というのも普段からレックスは完全に眠ることはしておらず、常に半分だけ意識を起こしており瞬時に動けるようにしているのであった。

そんなレックスが周囲を見渡すと焚き火のそばにホムラの姿がなかった。

まさか……連れ去られた、と最悪の展開が頭によぎったレックスが立ち上がりさらに周辺を見渡すと少し離れた水辺にホムラの後ろ姿を見つけたのであった。

ただの早とちりだったと安心したレックスは手に持ったままのブルーローズをホルスターに収めてホムラの方へと歩いていった。

「まだ起きてたのか？」

「あつ……レックス」

「明日も朝から歩くんだ、休める時に休んどきな」

「そうなんですけど……なんだか寝付けなくて…」

「……そうか」

レックスがそう言うのと二人はしばらくの間、水面を眺めていた。

「そーいや……礼がまだだったな」

「えっ？」

「こいつだよ」

レックスは自身の胸元のコアクリスタルを親指で指さしながら助けてもらった礼を言った。

「お前のおかげで命拾いした……改めて礼を言わせてくれよ」

「いえそんな……」

「ただこれから先、あいつらが邪魔してくるかもしれないねえ」

「古代船で戦った彼らですね？」

「ああ……次に会うときは確実に息の根を止めてやる……あいつと俺の約束のために」

夜の闇の中で青白く光る右腕を見ながら、レックスは決意を固めたようにそう言った。

「あの…レックス」

「なんだ？」

「私と会った時にも言ってた”約束”って？」

ホムラがそう質問すると、レックスは表情を曇らせ自身の異形の右腕に視線を落とし
たのであった。

「俺に力がなかったせいで、守れずに死なせちまった家族との……………約束だ……」

そう呟くとレックスは踵きびすを返し先程まで腰掛けていた場所へと戻るために歩き出
た。

「じゃあ俺はもう一休みするからよ、ホムラも早く寝ろよ」

「はい……おやすみなさい、レックス」

レックスを見送ったホムラは再び水辺から水面を見つめていた。

そして胸元でキュツと手を握り締めて懺悔するかのような悲痛な表情を浮かべると誰にも届かない小さな声で呟いた。

「ごめんなさい……レックス」

地平線から朝日が登る少し前の時間にレックスは閉じていた目を開いていた。

軽く体を動かして凝り固まった筋肉を解すと、いまだに眠り夢の中にいるニアとビヤツコ、ホムラを起こさないように手早く新しい薪に変えた焚き火を用意すると、ブルーローズを分解してメンテナンスを始めたのであった。

朝日が出始める頃にはレックスはブルーローズのメンテナンスを終わらせてホルスターにしまい、他の皆が目を覚ますまで焚き火を見つめて続けていた。

パチパチと薪が小さく爆ぜる音を出しながら燃える篝火かがりびを見つめるレックスの脳裏には、かつての仲間達が笑い声あげながら騒いでいる姿が浮かび上がっていた。

レックス

よっ!!期待の新屋ってか

団長の妹をちゃんと幸せにしてやれよ!!

ワハハハハッ

懐かしい光景を思い出したレックスだったが、あの楽しかった日々が突如として打ち砕かれた光景も同時に思い出していた。

そして、生まれてはじめて心の底から気を許せた最愛の女性の最期の姿も

「待つてろ、神さまよお……俺はお前を……殺す」

皆が寝静まる中でレックスは、憎悪の感情を込めた言葉を呟きながら右手を握り締めていた。

「んあ〜…?」

「むう?……おはようございます皆さま」

「ふあ〜、おはようございます」

太陽が地平線から登りきり、その姿を見せた頃にホムラ達は目を覚ましたのであった。

レックス達は軽く身支度を整えると、今後の行動について話し合うのであった。

「で?これからどうするんだ?……つーか、ここはグーラのどの辺りなんだ?」

「たぶん…お腹あたりだね」

「ふうん、すぐに分かるってことはやっぱりニアはグーラ人だったのか」

「もしかして今頃気付いたのか？」

「わりいな、グーラ人とはあんまり交流したことねえからよ」

ハハハッと笑いながらレックスはそう言った。

「グーラはお嬢様の故郷なのです」

「街に行きたいんなら、まずこの森を抜けないとね……道なりに登っていけば平原に出るはず」

「ならとつとこんな森抜けるぞ」

そして、レックスを先頭にニアとビヤッコ、ホムラ達は歩き出し平原を目指すのであった。

道中に襲いかかってくるモンスターを相手にしながらもレックス達は上を目指していき、ついに森の出口に到着した。

森から出てレックスとホムラは視界いっぱい広がる平原を見て圧巻され、ニアはそんな二人を見て得意気そうな表情をしていた。

グーラ領

「うわあ、ものすごく広い平原……」

「想像してたのよりすごいな、こいつは」

「向こうに見えるのがグーラで一番大きな街トリゴ」

広い平原に驚くレックス達の横でニアが奥の方に見える街について説明するのであった。

「とりあえず街までは送ってく……着いたら、そこでアタシ達の役目は終わり」

「あ？何でだ？」

「何でって……アタシはアンタらと……レックス達と一緒にいることは出来ないんだ」

そう言いながら、ニアは悲しそうな表情を浮かべていた。

「……あいつらとの事があるからか？」

「出会ってから日が浅いとはいえ一応……仲間だからね」

「仲間？あのクソ野郎共はニアを殺そうとしてたんだぞ」

「それでも……アタシの居場所はあそこにしかないんだ……」

「ニア…」

「……………さあ、行くよ」

いまにも孤独感で押しつぶされてしまいそうなニアを見たレックスであったが、ニアが先に歩き出したために声をかけることが出来なかった。

そして、レックス達一行はトリゴの街に向かって進むのであった。